き　ら　り

令和２年度（第 11 集）

～実践と研究のあゆみ～

研　究　主　題

児童生徒が「自ら学ぶ」姿を目指して

～「何を学ぶか」「何が身に付いたか」が明確な授業づくり～（１年次）

小学部4年（個人作品）「秋田きらり支援学校　10周年　おめでとう」

秋田県立秋田きらり支援学校

巻　　頭　　言

本校は本年度、１０周年記念式典やそれに係る多くの行事を予定していました。

しかし、皆さんご存じの通り、新型コロナウイルス感染症の感染拡大により、４月からおよそ１ヶ月の間、私たちがいまだ経験したことのない学校閉鎖という事態に見舞われました。これまで私たちは当たり前のように、自校研究の客観性を高めるために、公開授業研究会を開催したり、指導助言者を招聘したりして、外部からの多岐にわたる御指導・御助言を参考に自校研究の進め方や研究方法の見直し、授業改善を行うという手法をとってきました。

さらには、年何度か全校授業研究会を通して、教職員全員が同じ観点を持って授業を参観し、自校の研究及び授業における手立て等を確認することで、学校研究自体を共有するスタイルを確立してきました。

しかし、今年度はなかなかそのような体制をとることができませんでした。そのような中、例年とは違った環境の下で、ICT等の活用やグループでの話し合いを重ねるなどして実践を充実させるよう研究を進めてきました。

今回、研究を通して、自ら学ぶ姿を引き出すための教育課程の在り方や各教科に自立活動の視点からの手立てを講じることの有効性も明らかになってきました。研究のまとめとなる次年度は、校内研究の推進に今年度の研究体制が加わり、さらにはコロナ対策を講じながら本研究のまとめに取り組みたいと考えています。

本校の研究主題『**児童生徒が「自ら学ぶ」姿を目指して**』～「何を学ぶか」「何が身についたか」が明確な授業づくり～は、本年度の学校経営重点目標である、「主体性や自主生を育む授業実践」や、「障害及び自己理解を踏まえた心と体を育てる生き方指導」ともリンクしています。

さらにこのことは、新学習指導要領の方向性として示されている新しい時代に必要となる資質・能力の育成としての「学びに向かおうとする力」にもつながっています。

人生や社会に生かそうとするという視点にたった場合、研究というステージにも活用されたICT機器は、肢体不自由やそれを伴う重複障害から派生する困難さの質・量を共に軽減する役割をもつと共に、「自らが主体となって、物事に向かう力」が向上し、卒業後の大きな目標である自立と社会参加につながることが期待されます。感染症の事を考えると次年度以降の授業の手立てとして、児童生徒の実態に応じてICTを活用していくことも一つの試みであるという思いを強くしました。

終わりになりましたが、本校の研究推進に対しまして、コロナ禍に有りながら秋田大学教育文化学部　准教授 谷村佳則先生から丁寧な御指導を頂戴したことに心から感謝申し上げ、合わせて引き続き本校の研究推進にお力添えと、御高覧頂きました皆様からもたくさんの御指導を頂きますようお願い申し上げ、巻頭言とさせていただきます。

令和３年３月
秋田県立秋田きらり支援学校
校長　新 目　基

目　　次

巻　頭　言　　校　長　　新目　基

Ⅰ　全校研究の概要

1　研究主題　・・・・・・・・・・・・・・・・・　1
2　研究主題の設定理由　・・・・・・・・・・・・・・・・・　1
3　研究の目的　・・・・・・・・・・・・・・・・・　1
4　研究仮説　・・・・・・・・・・・・・・・・・　1
5　研究組織　・・・・・・・・・・・・・・・・・　1
6　研究内容と方法　・・・・・・・・・・・・・・・・・　1～3
7　授業づくりと教育課程のＰＤＣＡサイクル　・・・・・・・・・・・・・・・・・　4
8　研究計画　・・・・・・・・・・・・・・・・・　4
9　研究の経過　・・・・・・・・・・・・・・・・・　5～7
10　研究のまとめ　・・・・・・・・・・・・・・・・・　7～8
資料１　自立活動シート　・・・・・・・・・・・・・・・・・　9
資料２　研究だより　・・・・・・・・・・・・・・・・・　１０～２１

Ⅱ　各研究グループの実践

Ⅰグループ（準ずる各教科等を学習するグループ）　・・・・・・・・・・・・・・・・・　２２～２５

Ⅱグループ（知的代替の各教科等を学習するグループ）　・・・・・・・・・・　２６～２９

Ⅲグループ（主として自立活動を学習するグループ）　・・・・・・・・・・・・・・・・・　３０～３３

Ⅳグループ（訪問指導の学習グループ）　・・・・・・・・・・・・・・・・・　３４～３７

Ⅲ　自立活動の実践　・・・・・・・・・・・・・・・・・　３８～４９

あ　と　が　き　　副校長　　大山　美香

令和２年度　研究同人

Ⅰ　全体研究の概要

Ⅰ　全校研究の概要

１　研究主題

児童生徒が「自ら学ぶ」姿を目指して～「何を学ぶか」「何が身に付いたか」が明確な授業づくり～

（１年次／２か年）

２　研究主題の設定理由

（１）昨年度までの研究より

昨年度までの２か年の研究を通して，自立活動シートの作成と授業づくりへの活用に取り組んだ。今年度からは，この自立活動シートを教育資料に含み，児童生徒の生活や学習を「支える」役割として，個別の指導計画や年間指導計画，授業づくりに活用していく。

（２）学校経営の方針より

授業は，学校教育目標を達成するために編成された教育課程に基づいて行われるものである。令和２年度の学校経営方針の重点として，次のことが挙げられている。

１　教育目標「将来の自立と社会参加に必要な力を育成する」
↓
２　教育方針「根拠の明確な教育課程を編成し，主体性，自主性を育む教育を展開する」
↓
３　本年度の重点
「主体性や自主性を育む教育実践」：目指す児童生徒像
「新学習指導要領の趣旨を踏まえた教職員全員によるカリキュラムマネジメントの推進」：社会的要請
「障害及び自己理解を踏まえた心と体を育てる生き方指導」：自立活動の視点

（３）昨年度の研究及び教育課程の改善より

昨年度の研究を通して各学習グループが教育課程の改善を行った。それらのことについて，授業づくりを中心に検証，検討，改善していく。

（４）本校の果たす役割より

県内唯一の肢体不自由及び病弱者である児童生徒を対象とした特別支援学校である。学習グループごとの実践を探求し，他校の肢体不自由を有する児童生徒の授業づくりや教育課程編成に対し，取組を発信する。

３　研究の目的

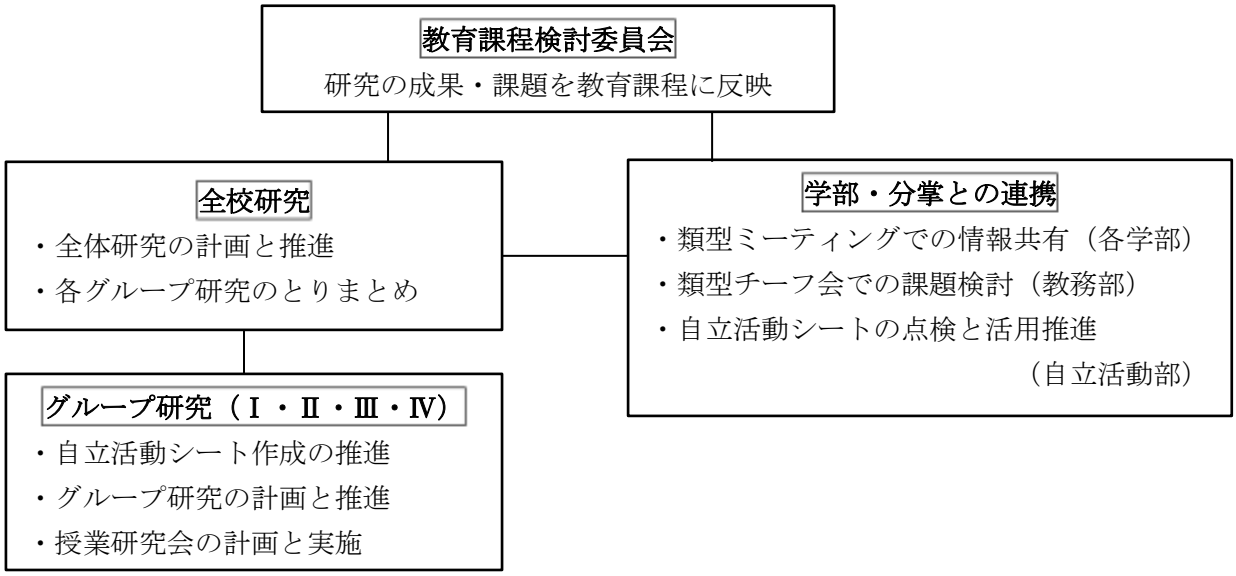
研究の目的は，授業づくりを通して，児童生徒の「自ら学ぶ」姿を実現することである。そのための授業づくり・授業改善では，次のことに焦点を当てて取り組む。

・「何を学ぶか」：各教科等の目標や指導内容の検討と明確化
・「何が身に付いたか」：授業及び単元題材を通した定期的な学習評価

４　研究仮説

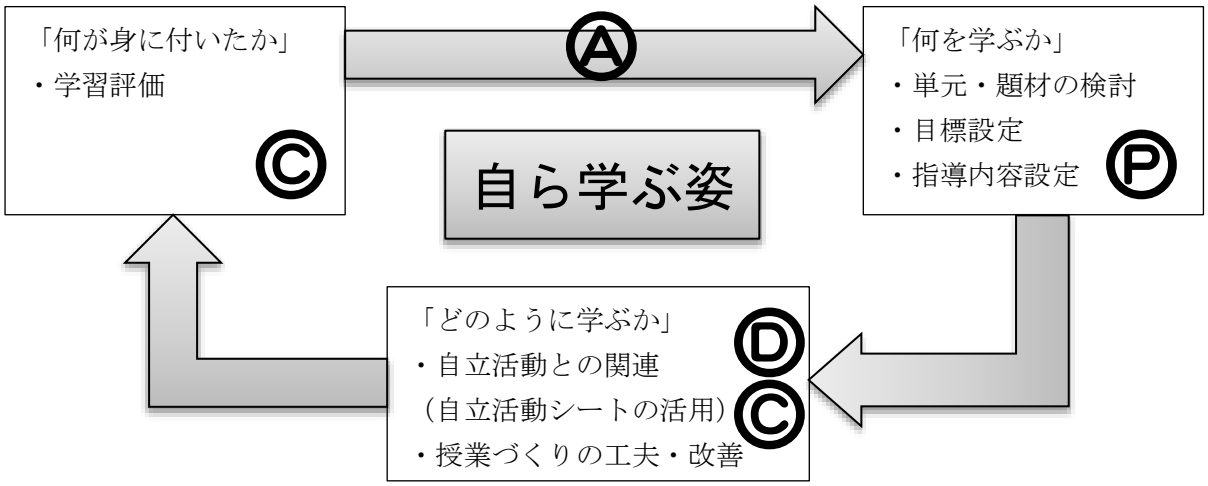
児童生徒一人一人の「自ら学ぶ」姿にせまるために，「何を学ぶか」（目標や指導内容）「何が身に付いたか」（学習評価）を明確にした各教科等の授業づくりを行う。それにより，児童生徒が学びを通して身に付いたことを実感し，「自ら学ぶ」意欲の高まりや，態度や行動として表れるようになるだろう。

５　研究組織



６　研究内容と方法

児童生徒一人一人の「自ら学ぶ」姿を具体化し実現するために，次の内容と方法で取り組む。



【イメージ図】（授業づくりのＰＤＣＡサイクル）

（１）各研究グループによる研究推進

・各研究グループの実情や課題に応じた研究計画
・授業研究会による評価と改善
・児童生徒の変容（自ら学ぶ姿）の評価

【評価の観点】
・研究グループ内での取組を共通理解し，反映させた授業づくりを行ったか。授業研究会の意見を生かして，授業改善をしたか。
・児童生徒の「自ら学ぶ」姿が見られるようになったか。

＊各研究グループの実情及び課題など（昨年度からの引継ぎ事項）

研究グループ	実情及び課題についての概要
Ⅰグループ	＊準ずる各教科を学習するグループ（以下，Ⅰ類型）
教科	・教科学習で目指す資質・能力の育成を図る。 ・少人数のメリットを生かしながら，児童生徒一人一人が**「自ら学ぶ」ための授業づくり**を探っていく。
Ⅱグループ	＊知的代替の各教科を学習するグループ（以下，Ⅱ類型）
生活単元学習 遊びの指導 生活科	・「合わせた指導」を行う場合でも，各教科の目標を達成していくことになるので，単元を構成するうえで，どの単元でどの教科の内容を取り扱うか計画的に行う必要がある。 ⇒　**合わせた指導で取り扱う教科（目標，指導内容）を明確にする。**
Ⅲグループ	＊主として自立活動を学習するグループ（以下，Ⅲ類型）
算数・数学科	・昨年度は，「国語科」「体育科（保健体育科）」「美術科」を実施した。 ・今年度は「算数・数学科」を新設した。**Ⅲ類型の児童生徒の「算数・数学科」の在り方を探っていく。**
Ⅳグループ	＊訪問教育（自立活動と特別活動）の学習グループ（以下，訪問）
自立活動	・現在の年間指導計画を見ても，「国語的活動」「音楽的活動」「造形的活動」などが含まれている。**「国語的」という視点から「国語科」への視点で授業づくりを考えてみる**。⇒　来年度の教育課程を見据えて試行錯誤する。

（２）「何を学ぶか」「何が身に付いたか」の設定と検討

・「何を学ぶか」：目標や指導内容設定の工夫，明確化

・「何が身に付いたか」：自己評価，他者評価，評価方法の工夫

【評価の観点】

・各研究グループの研究計画に沿って，具体的で妥当な目標や指導内容を設定できたか。

・明確な目標を設定したことで，児童生徒のできるようになったことや身に付いたことが評価できたか。

（３）自立活動シートの活用

・目標を達成するための手立てや配慮点との関連付け

【評価の観点】

・各教科等の授業づくりに自立活動シートを効果的に活用したか。活用が定着したか。

（４）教育課程の改善

・研究の成果と課題の整理

・類型チーフ会（教務部主催），教育課程検討委員会での検討

【評価の観点】

・各研究グループの成果と課題を整理し，次年度の教育課程編成に生かしたか。

＊（１）は各グループに応じて，（２）（３）は各グループが共通して取り組む。（４）は各グループの取組を教育課程の改善に反映させる。

７　授業づくりと教育課程のＰＤＣＡサイクル（カリキュラムマネジメント）

＜Ｒ元年度の研究＞
・自立活動シート作成と活用
・自立活動の視点を生かした授業づくり
Ⓓ

↓

＜教育課程改善＞
・Ｒ元年度の研究＋学習指導要領を踏まえて
Ｒ２年度の教育課程を編成
Ⓒ Ⓐ

↓

＜Ｒ２年度の教育課程編成＞
・Ｒ２年度の教育課程を新たに実施
Ⓟ

↓

＜Ｒ２年度の研究＞**授業づくりのPDCA**
・授業構想，実践，評価，改善
・授業づくりを通して，自主性・主体性は育ったか（何を学んだか・何が身に付いたか）
・研究の成果と課題，改善点
Ⓓ

→

＜教育課程改善＞
・Ｒ２年度の研究＋学習指導要領を踏まえて教育課程を評価し，Ｒ３年度の教育課程を編成
Ⓒ Ⓐ

↓

＜Ｒ３年度の教育課程編成＞
・Ｒ３年度の教育課程を新たに実施
Ⓟ

↓

＜Ｒ３年度の研究＞
・授業構想，実践，評価，改善

８　研究計画

期日・曜	研究，研修会名	研究，研修内容等
4/22・水	【第１回全校研究会】	・今年度の研究主題と概要について
5/15・金	グループ研究会①	・各グループ研究の研究計画について
6/16・火	グループ研究会②	・授業づくり，授業改善
7/14・火	グループ研究会③	・授業づくり，授業改善
8/27・木	グループ研究会④	・授業づくり，授業改善
9/29・火	グループ研究会⑤	・授業づくり，授業改善
10/26・月	グループ研究会⑥	・授業づくり，授業改善
11/25・水	グループ研究会⑦	・授業づくり，授業改善
12/17・木	グループ研究会⑧	・各グループ研究の評価
1/ 8・金	病弱教育研修会	「病気の子どもへの特別な支援」 【講師】京都女子大学　教授　滝川　国芳　氏
1/19・火	グループ研究会⑧	・各グループ研究のまとめと次年度の課題
2/16・火	グループ研究会⑨	・各グループ研究のまとめと次年度の課題
3/ 3・水	【第２回全校研究会】	・研究のまとめと次年度に向けて

＊今年度は，感染症対策として，全校規模の授業研究会を実施せず，研究グループ単位を基本とする。

９　研究の経過

ここでは，今年度の研究活動について，「６　研究内容と方法」で述べた各【評価の観点】に沿ってまとめていく。　（＿＿＿＿＿＿の部分は各項目の主となる取組である。）

（１）各研究グループによる研究推進

この研究で述べる「自ら学ぶ」とは，「主体性・自主性」を指す。「主体性」も「自主性」も自ら考えて行動する力ではあるが，それぞれの意味は次のとおりである。

「自主性」：やるべきことが分かり（明確で），（人に言われなくても）自ら率先してやること。
つまり，やるべきこと（活動のゴール）はこちらが示す。
「主体性」：何をやるのか自分で考えて判断し行動すること。
つまり，目的をもち，そのためにするべきことを自分自身で明確にする。
＜出典：社会人のためのビジネス情報マガジン「社会人の教科書」より＞

本研究で使用している「自ら学ぶ」は，教育心理学の観点では「主体性」に当たると述べられている。しかし，本校の児童生徒一人一人の実態や育てたい姿を考えたときに，それは「主体性」だけではなく，「自主性」であったり「主体性」であったりその姿は様々になることから，研究主題の「自ら学ぶ」姿は，広い意味で捉えるものとする。

研究主題である「自ら学ぶ」姿を実現するための方法を，各研究グループの副題に設定し，それぞれの実践に取り組んだ。各研究グループの具体的な取組は**Ｐ22～Ｐ37「Ⅱ　各研究グループの実践」**で述べる。各研究グループの研究副題は以下のとおりである。

研究グループ	研　究　副　題
Ⅰグループ	～自分の考えから「めあて」を設定し，学んだことを実感できる授業づくり～
Ⅱグループ	～「学びの履歴シート」を活用して～
Ⅲグループ	～算数・数学科の視点からの実態把握と根拠のある目標設定～
Ⅳグループ	～国語科の目標を取り入れた授業づくり～

（２）「何を学ぶか」「何が身に付いたか」の設定と検討

研究１年次ということで，今年度は各研究グループが「何を学ぶか」に焦点を当て，主に目標や指導内容の設定について協議を重ねている。

	主　な　取　組	成果（○）と今後の課題や取組（●）
Ⅰグループ	・「児童生徒の発信を生かした授業のめあての設定」について，教育専門監の授業ＤＶＤを用いた研修や，互いの実践紹介を通して検討した。	○単元のはじめに学習計画を立てて毎時間の見通しをもてるようにすることが，めあての設定に効果的であった。 ●めあての設定において「児童生徒の発信」だけで追っていくのではなく，まとめや振り返りの仕方と併せて検討を続ける。
Ⅱグループ	・指導計画の作成において「学びの履歴シート」を活用し，指導内容を整理した。それにより，各教科と「合わせた指導（生活単元学習，遊びの指導）」の関連を明確にし，目標や学習内容の具体化を図った。	○指導内容が焦点化された。今後積み重ねたい内容を見ることができ，系統性を意識できた。 ●シートの活用を継続し，「できる」ことと「できつつある」ことの評価を検討する。

Ⅲグループ	・算数・数学科の授業づくりにおいて，学習指導要領と併せて「学習到達度チェックリスト」を使用することで，より細やかで客観性のある実態把握と目標設定を検討した。	○算数・数学科の視点からの実態把握や目標設定ができた。また，自立活動との違いについて共有できた。 ●今年度の取組を継続しながら学習評価に焦点を当てる。
Ⅳグループ	・これまで「自立活動」の中で取り扱っていた絵本を題材にした授業を，国語科の視点で見直し，目標や指導内容を明確にした授業づくりを検討した。	○国語科の目標で授業づくりをしたことで自ら学ぶ姿が見られ，効果的だった。 ●国語科の目標の精度を上げながら，評価の仕方について検討する。

（３）自立活動シートの活用

平成３０・令和元年度の研究において，『学習指導要領解説自立活動編』に示されている流れ図を基に本校独自の自立活動シートを作成した。この自立活動シートを，今年度からは教育資料に位置付け，個別の指導計画や年間指導計画と密接に関連をもたせて活用できるようにした。また，自立活動シートを，時間における指導だけでなく各教科等の指導で生かせるよう，研究だよりを通して周知を図った。なお，今年度の様式は**【Ｐ９　資料１　Ｒ２自立活動シート様式】**に，研究だよりは**【Ｐ10 研究だより No.1】**に示している。

（４）教育課程の改善

今年度は，各学習グループの実情に応じて，「何を学ぶか」「何が身に付いたか」に焦点を当てた授業づくりをすることで，児童生徒の「自ら学ぶ」姿にせまることができるだろう考え，研究を進めてきた。各研究グループの成果や課題，改善策をまとめ，次年度の教育課程編成に反映させていくことになるが，主なものは次のとおりである。

	○：教育課程にかかわる成果，●：課題，★：次年度に向けた改善策
Ⅰグループ	○児童生徒の興味関心，気付き，振り返りなどの発信から「めあて」を設定することで，学習の目的意識が高まり，自ら学ぶ姿が多く見られた。 ●教科の特性や単元内容によっては，児童生徒の発信を生かした「めあて」の設定が難しい場合も多い。 ★児童生徒が自ら学び，「何が身に付いたか」を実感するために，「めあて」の工夫とともに，まとめや振り返りの充実を図る。
Ⅱグループ	○合わせた指導（生活単元学習，遊びの指導）において，「学びの履歴シート」を活用したことで，単元の中で学ぶ各教科の学習内容が明確になり，自ら学ぶ姿が見られるようになってきた。 ○小学部では，これまであまり取り扱ってこなかった内容（社会の仕組み，生命，ものの仕組み等）を，新設した生活科で実施した。他の教科等とも関連付けながら指導を進め，児童の興味の広がりや深まりにつながった⇒「生活科」は次年度も継続。 ●「学びの履歴シート」で，履修した内容をチェックすることはできるが，評価への活用がまだ不十分である。 ★授業計画のツールとして，「学びの履歴シート」を積み重ねていく。

Ⅲグループ	○「算数・数学科」の見方・考え方で授業づくりに取り組むことで，目標や学習内容が明確になり，自ら学ぶ姿が見られるようになった。⇒「算数・数学科」は次年度も継続 ●児童生徒一人一人の目標を達成するための，学習集団（集団，個別）や学習環境の工夫が必要である。 ★「身に付いたこと」を確実に積み重ねていくために，目標や指導内容の系統性について整理する。
Ⅳグループ	○「国語科」を意識した授業づくりをしたことで，目標や手立てが明確になり，児童生徒が題材（物語など）を楽しみ，自ら表現する姿が見られるようになった。 ●自立活動の指導との違いや関連付けについて，理解を深めていく。 ★次年度，「国語科」を実施する。児童生徒の訪問指導日数に応じて，「国語科」の授業時数を設定する。

（５）感染症予防対策をした研究推進の工夫

本校は在籍する児童生徒のほとんどが基礎疾患を有しており，日頃から感染予防に努めている。今年度は，新型コロナウィルス感染症対策として，密になる状況を作らないよう工夫しながら研究を推進してきた。推進方法は，以下のとおりである。

１）授業研究会の実施方法

・全校単位での授業研究会を実施しない（全校職員数が１００名を超えるため）。授業研究会を実施する場合は，研究グループ単位（２０～３０名程度）で行う。

・授業参観の方法は，特定の教室に大人数の職員が出入りする状況を作らないため，できるだけ廊下からの参観，モニターによる参観，ビデオ視聴とする。

２）研究だよりによる情報提供

・４つの研究グループの取組をできるだけタイムリーに情報提供できるよう，研究だよりを発行した。今年度発行した研究だよりは，**【Ｐ10　研究だより No.1～】**に示している。

３）オンラインや動画配信による研究会への参加推進

・研究だよりを通して，１５校のオンライン研究会を案内した。オンラインや一定期間内の動画配信は，休日や各々の空き時間を活用して視聴できたり，個々のニーズに応じて視聴するコンテンツを選択できたりするので，多くの職員が参加した。

１０　研究のまとめ

（１）グループ研究の成果（○）と課題（●），改善点（★）

○授業づくりや協議など，研究で取り組んでいることが，教育課程の改善につながっているという職員の意識が高まった。

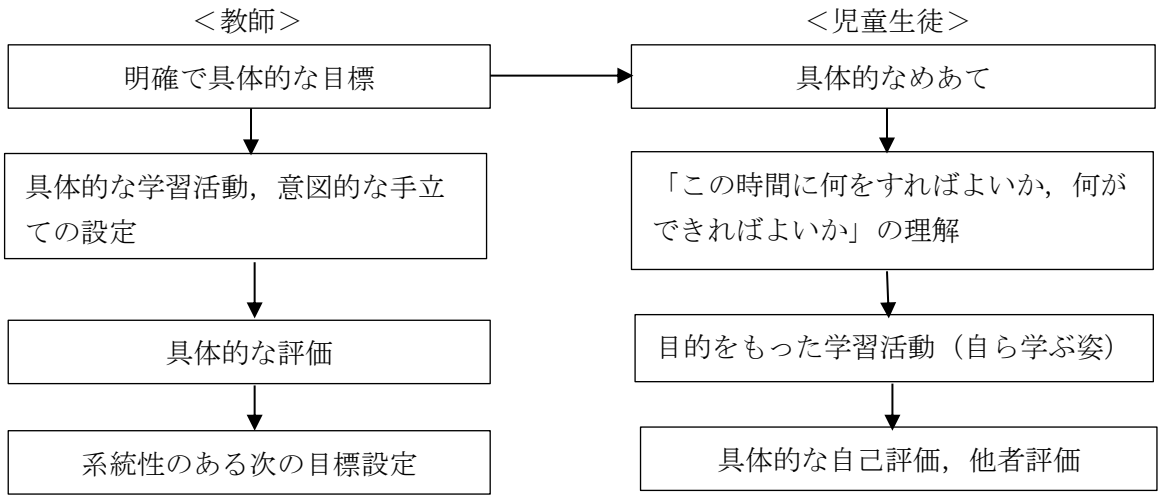
○各教科等の授業づくりにおいて，自立活動の視点から手立てを講じることが定着してきた。（各教科等と自立活動の密接な関連）

●グループ中心の研究活動としたため，各グループの研究を共有する取組が不十分だった。

★感染症予防対策の一環として，10 月まで外部の方の来校を制限していた。唯一，Ⅲグループ授業研究会では，秋田大学教育文化学部　准教授　谷村　佳則　氏　に学びのある指導助言をたくさんいただくことができ，有意義な研究会となった。次年度は，グループ単位での授業研究会や研修会に，できるだけ外部からの評価をいただく機会を設定したいと考えている。

（２）「自ら学ぶ」姿を実現するための目標や指導内容の設定に向けて

今年度は，「自ら学ぶ」姿を目指すことを共通の研究主題とし，その姿にせまるための内容と方法を，研究グループに応じて設定して進めてきた。今年度は研究１年次であることから，どの研究グループも「何を学ぶか」に焦点を当て，目標や指導内容の設定について検討をした。成果や課題，改善点は研究グループそれぞれではあるが，共通して【明確で具体的な目標設定】が必要であると言える。次年度は，「何が身に付いたか」にも焦点を当てて，主に評価を検証していく。【明確で具体的な目標設定】をすることが，下の図のように，自ら学ぶ姿と適切な評価，次の目標設定につながると考え，授業づくりに取り組んでいきたい。



（３）「自ら学ぶ」姿にせまる教育課程の編成に向けて

今年度の研究の成果や課題を反映させながら，３回の教育課程検討委員会を経て，次年度に向けた教育課程の改善に取り組んでいる。このようにして計画した指導目標や指導内容，授業時数等の実施が，「自ら学ぶ」力を高めることにつながったか，次年度の授業づくりを通して検証していきたい。

【参考文献】
・特別支援学校学習指導要領解説　総則編（小学部・中学部・高等部）　文部科学省
・特別支援学校学習指導要領解説　各教科編（小学部・中学部・高等部）　文部科学省
・特別支援学校学習指導要領解説　自立活動編（幼稚部・小学部・中学部）　文部科学省
・学習評価の在り方ハンドブック（小・中学校編，高等学校編）　文部科学省
・障害の重い子どもの目標設定ガイド　徳永　豊　編著　2014

記入の仕方

＜自立活動シート（高等部〇年〇組　きらりたろう）＞

（１）実態把握

１　健康の保持	２　心理的な安定	３　人間関係の形成

・『実態票』の中から、自立活動に関する実態を記入する。必要な内を追加する。
・子どもが現在できていること、支援があればできること、興味・関心のあること、得意なこと等を把握する。
★偏りや思い込みによる記入のないよう、**資料「実態把握の主な観点」**を参考にする。

４　環境の把握	５　身体の動き	６　コミュニケーション

学習上・生活上の困難さ	・学習や生活をするうえで、困難さ、困り感、つまずきとなっていることを記入する。本人だけでなく、保護者の気付きも参考にする。

（２）背景要因や課題設定理由、年間目標

目標の根拠が特に大事です！！

背　景　要　因	～のため、困難さが生じている

・困難さがどこからきているのか要因（背景）をとらえる。
・発達検査や知能検査の読み取りも参考にする。

課題設定理由	～すれば（～があれば）～できる（だろう）

・「これができたら、これが改善されたら、学習や生活がもっと楽になる、質が向上する、主体的に取り組みやすくなるだろう」というイメージで、課題を焦点化していく。
・今できることや、興味関心のあることを生かす視点を大切にする。

年　間　目　標	・『１年後の達成を目指す姿』を目標として記入する。 ・できるだけ具体的な姿を設定する。（評価可能な）

（３）各教科における手立て・項目・指導場面（＊時間における指導：個別の指導計画、年間指導計画に記載）

手立て・環境設定・配慮など	項目	指導場面

・「時間における指導」と「各教科等における指導」が混在しないように書き分ける。
・「時間における指導」については、個別の指導計画と年間指導計画をもって、具体的にする。
・「各教科等における指導」については、その子の困難さに対応するために、具体的にどんな方法で、どの項目と関連させて、どんな場面で指導するのかを記入する。
・取り組みやすく、「本人もやってみよう」と思えるような手立て等を設定する。
・指導方法を共有するために、教師側の書き方で記入する。（～できるように～する）
★必要な指導内容を六区分２７項目から選ぶ際に、連続した３年間分をチェックできるように、**資料「自立活動の区分と項目チェックリスト」**がありますのでご活用ください。

き　ら　り

令和２年度（第 11 集）

～実践と研究のあゆみ～

研　究　主　題

児童生徒が「自ら学ぶ」姿を目指して

～「何を学ぶか」「何が身に付いたか」が明確な授業づくり～（１年次）

小学部4年（個人作品）「秋田きらり支援学校　10周年　おめでとう」

秋田県立秋田きらり支援学校

研究だより

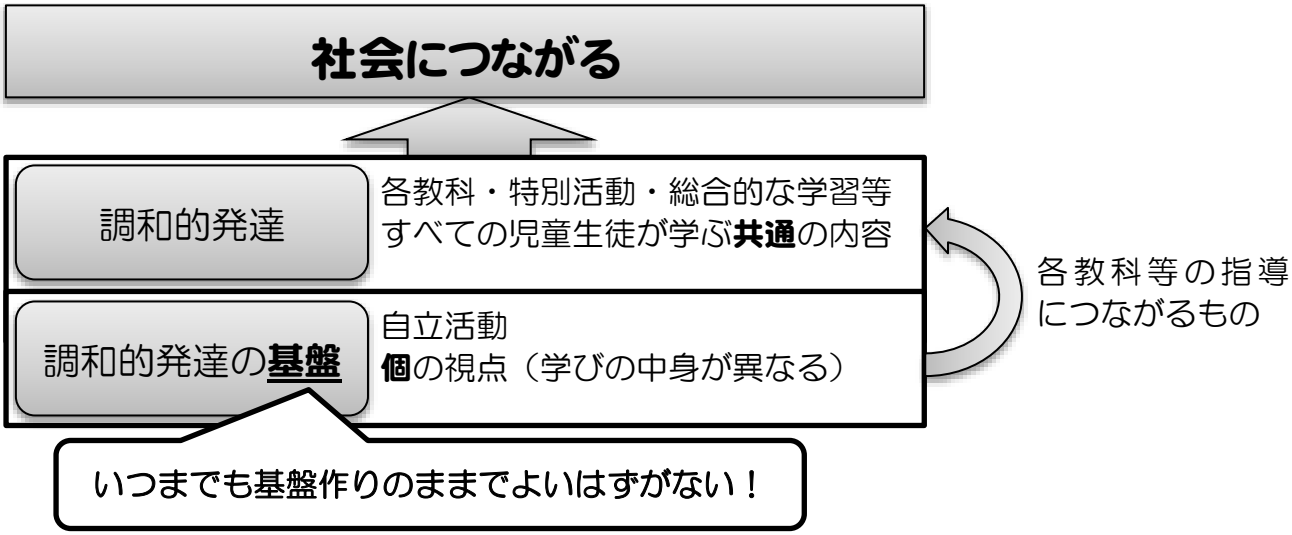
No. 1
令和2年5月 29 日発行

学校が再開し、生活や学習のリズムも整ってきたのではないでしょうか。・・・とはいえ、先生方は感染症へ細心の注意を払う日々を送っていることと思いますで、授業スタイルも従来通りにいかないでしょう。体と心の健康に留意しながら、研究主題である「自ら学ぶ」姿を授業づくりを通して追求していきましょう！今年度も研究だよりで、校内や校外の情報を提供したいと思います

各教科と自立活動の違いは何か？

「自立活動」は各教科を支える役割だと、昨年度の研究で分かったけど、各教科との関係をもっと分かりやすく知りたい！！

新学習指導要領において改めて『各教科の学び』が重視され、本校でもすべての学習グループで教科または合わせた指導を研究対象としています。このことについて、**筑波大学教授で桐が丘特別支援学校長の下山直人氏**が分かりやすく述べていますので、紹介します。



・新学習指導要領において、改めて各教科を学ぶ意義が問い直され、目標及び内容等が見直された今日、肢体不自由特別支援学校においても、社会との視点から、各教科の指導を検討する必要があるでしょう。
・各教科の指導では「調和的発達」を目指し、**自立活動の指導では各教科等を学ぶ基盤を作る**のです。**自立活動の指導は、各教科等の指導につなげるもの**であることを忘れてはなりません。各教科の学習が困難であれば、自立活動に替えて基盤作りをするのですが、**いつまでも基盤作りのままでよいはずがありません**。自立活動の指導は、「社会につながる」**各教科にバトンタッチする方向性**をもって行わなければなりません。

＊「肢体不自由教育　第 244 号　各教科等の指導と授業づくり」より抜粋

新学習指導要領は、「社会に開かれた教育課程」の実現を目指しています。それを具体的に示したものが、各教科の三つの柱で整理されています。各教科の学びを支える役目を果たすのが自立活動です。このように理解すると、各教科と自立活動の関連が分かりやすくなります。

（文責：藤原　恵理子）

研究だより

No. 2
令和2年6月 30 日発行

６月１０日（水）は、指導主事計画訪問でした。学校が再開して２週目に学習指導案を提出することとなり、難儀もあった反面、指導案を作成したり授業を行ったりしたことでよかったこと・改善が必要なこと・分からないことなど気付きもあったと思います。
本号では計画訪問の際に質問した事項についてまとめました。

「三つの柱」と「3観点」はどんな構造になっているの？

目標の『三つの柱』と観点別学習状況評価の『３観点』は、指導案にどう書き表したらいいの？

結論を言えば、学習指導要領において目標は『三つの柱』で整理されていますので、指導案作成の際にも**「知識及び技能知」「思考力、判断力、表現力等思」「学びに向かう力、人間性等学」の三つの柱に沿って目標を表記**することになります。（菊地真理指導主事より）
文部科学省国立教育政策研究所より発行された「学習評価の在り方ハンドブック」を基にして、学習評価の基本構造について説明します。　（文責：藤原　恵理子）

【参考文献】国立教育政策研究所　「学習評価の在り方ハンドブック」
国立教育政策研究所　「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料
＊どちらも国立教育政策研究所のホームページで見ることができます。

■目標や内容「三つの柱」

- 知識及び技能
  - ・知識やスキルについて十分習得しているか。
  - ・他の学習や生活場面でも活用できる程度に概念を理解したり、スキルを身に付けたりしているか。
- 思考力、判断力、表現力
  - ・問題解決に向けて、知識やスキルを有効に使えるか。
  - ・問題解決に向けて、自分の思いを表現していく能力を身に付けているか。
- 学びに向かう力、人間性等
  - ・各教科の内容を習得するために、調整したり試行錯誤したりしているか。
  - ・学習に主体的な態度や粘り強い取組で向かっているか。
  - ・仲間との協力、感情のコントロール、優しさや思いやりなどが育まれたか。

このような人間性等については、教科学習の中では評価対象にするのが難しいので、学習に対する主体性を切り出して評価に用いる。**こうした人間性等（良い点、進歩の状況など）については、日々の活動の中で児童生徒に伝える。**

■観点別学習状況評価の各観点

- 知識・技能
- 思考・判断・表現
- 主体的に学習に取り組む態度

＊この３観点に則して学習状況を見取り評定する。

研究だより

No. 3
令和2年7月 29 日発行

「算数・数学科」の目標設定をどう考える？（Ⅲグループ）

今年度から、自立活動を主とする学習グループで、「算数・数学科」を新設したけど、目標設定に悩みます・・・・(>_<)

「算数・数学科」と聞くと、私たちは「かず」「かたち」「計算」などと思い浮かべませんか？特別支援学校学習指導要領解説の各教科編（小・中）を見ると、**『事物を対象として捉えることが算数・数学科のもっとも基礎となる』**と書かれています。この力を付けることが、具体物の「ある」「ない」、大きさや形の違い、数の基礎などにつながっていきます。

Ⅲグループでは、算数・数学科の授業づくりの中でも、特に目標の設定やステップアップについて検討しています。先日の計画訪問では、菊地真理指導主事から次のようなお話がありました。

> まずは子どもの実態や育てたい姿から考えていくことが必要。学習指導要領やチェックリストだけでは目標がまだ粗いと思う。**子どもの実態を細かく丁寧に見取る**という、きらりの先生方の専門性を十分に生かして、**その時間その時間のステップアップ**を考えてほしい。そうすると、同じ目標ということにはならない。

では、どのよう目標を立て、ステップを考えていけばよいのか、具体例を挙げてみます。

例：本時の目標「りんごが隠されていることが分かり、布を引く」（数と計算１段階：ものの有無）

- 実態把握と課題設定は適切か
- どんな条件のもとで「隠されていること」が分かるか（異なる支援のもとで）
- どんな行動から「隠されたことが分かる」と言えるのか
- どのようにステップアップしていこうと計画しているか（隠す条件を変えていく、課題そのものを変えていく、など）

目の前で隠したのか？
はじめから隠していたのか？
りんごまでどのくらいの距離が離れているのか？
音や言葉掛けによる支援は？

隠されたときにきょろきょろ探したのか？
声を出して伝えたのか？
りんごがあることが分かり見付けるために布を引いたのか？

このように考えていくと、授業の目標さらには手立てや展開の仕方もより具体的になっていくのではないでしょうか。今月のⅢグループ研でも、目標設定について、多くの意見とアイデアが出されましたので、今後の授業づくりに生かしていきましょう！

こうした算数・数学科の目標や内容は、「生きる力」を育むことを目指すにあたり、数学的に考える資質・能力の育成を目指して設定されています。「日常生活の中で身の回りのものに気付く、対応させる」など、**数学的な見方や考え方から、生活を豊かにしていくことにつながる**よう、試行錯誤しましょう！

（文責：藤原　恵理子）

研究だより

No. 4
令和2年8月 25 日発行

「秋田県学力向上支援 web」を活用してください！

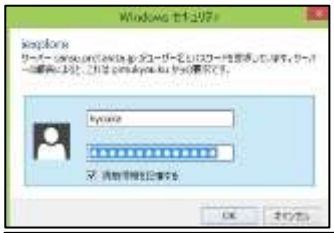
『秋田県学力向上支援 web』というサイトをご存じですか？こちらは、小中学校の教科指導に関して、教育専門監の授業 DVD の貸し出し、学習指導案など様々な情報を配信しているものです。今年度Ⅰグループ研究では、授業づくりの研修として活用しています。
『秋田県学力向上支援 web』の内容を見てみると、日々の授業づくりや改善に役立つ情報がたくさんあります。

◆秋田県学習状況調査の結果・分析
◆各教科の単元評価問題
◆教育専門監の授業 DVD リスト、学習指導案
◆授業研究会や資料等　　など

このサイトを見るためには、ユーザーID とパスワードが必要です。学校単位で設定されていますので、どうぞご活用ください！！手順は以下の①～③の通りです。

① アドレスバーにＵＲＬを入力する。

② 認証画面１が出てくるので、ユーザー名とパスワードを入力する。
ユーザー名　：　〇〇〇〇
パスワード　：　〇〇〇〇



③ 次に、認証画面２が出てくるので、ユーザー名とパスワードを入力する。
ユーザー名　：　●●●●
パスワード　：　●●●●

すると、このような画面が出てきます。

教育専門監のＤＶＤリストは、小・中学校の平成２６年度～令和元年度分が掲載されており、借りることができます。その場合は、貸出申請書の提出が必要となりますので、研究部の藤原恵まで申し出てください。

（文責：藤原　恵理子）

研究だより

No. 5
令和2年11月24日発行

Ⅱグループ授業研究会より　～生活単元学習～

９月１７日（木）に、高等部１年１組の生活単元学習「秋田の見所を紹介しよう２～秋田紹介動画の制作」の研究授業を行いました。授業提示をしてくださった先生方、本当にありがとうございました。本号では、新目校長先生の指導助言から、『合わせた指導』についてまとめました。

その１　学習指導要領より

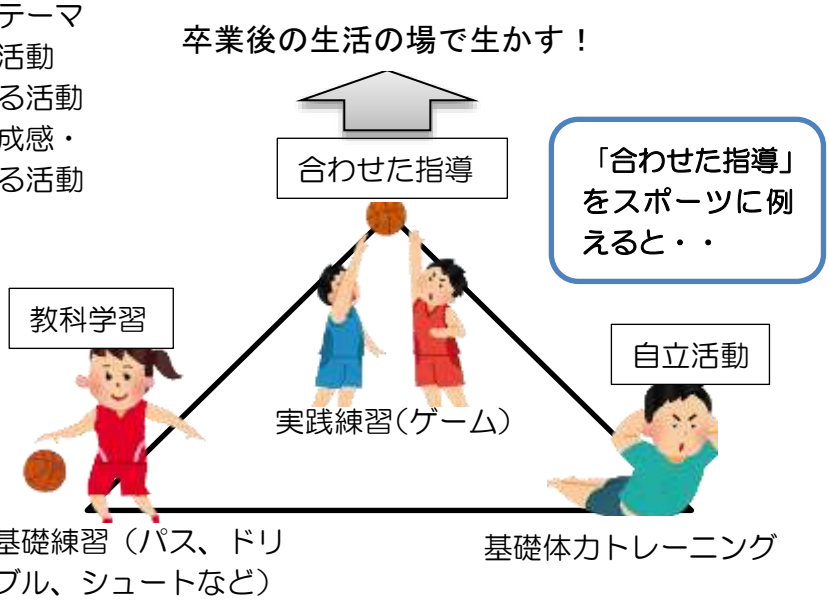
学習指導要領解説　総則編Ｐ345 を読むと「・・・各教科を合わせて指導を行うことによって、一層効果の上がる授業をすることができる場合も考えられる・・・」と記載されていますが、これは逆に、「できない場合も考えられる」ということにもなります。単独の教科で指導するよりも合わせた指導の方が効果があるといえる根拠（単元計画）を、今一度確かめる必要があります。

（学習指導要領解説　各教科編Ｐ11～14，26～35 を参照）

その２　「自ら学ぶ」姿とは

「合わせた指導」を行う場合でも、各教科等の目標を達成していくことになるので、最後には個々の知識や技能が積み上がっていく姿が求められます。それが指導の連続性です。獲得した知識・技能を実践の場で生かすことが効果的な「合わせた指導」であり、児童生徒の「自ら学ぶ」姿につながります。単元計画の際には、以下のような事項が含まれているか、見直してみてください。

- 興味・関心に基づいて生活に関わるテーマ
- 繰り返し取り組み、見通しをもてる活動
- ものづくりの楽しさを存分に味わえる活動
- 集団活動の中で、個々が責任感・達成感・成就感を味わえる活動



その３　学びの履歴シートの生かし方

既習した事実について、学びの内容が変化していったことを説明できる資料になれば、知識や技能の積み重ねや学びの連続性のある学習計画につながっていきます。

その４　「自ら学ぶ姿」「何を学ぶか」「何を身に付けさせようとしたか」の共有

「自ら学ぶ姿」をどう発揮させるかを具体的におさえておく必要があります。本校は、動きに制約のある児童生徒が多いことから、「自ら学ぶ姿」の設定に難しさもあります。だからこそ、

> 彼らの実態や特性に即し、自ら考え、動ける（発言できる）方策とは何か？
> 授業が終わったときに、「今日はこれが分かった！」と児童生徒自身が実感できるには？
> 学んだことが日常生活にフィーバックできるか？

といったことをもっと具体化していく必要があります。

（文責：藤原　恵理子）

研究だより

No. 6
令和2年 11 月 24 日発行

Ⅳグループ(訪問指導)の研究より ～国語科について考える～

Ⅳグループでは今年度、「国語科」の視点での授業づくりに取り組んでいます。訪問指導の教育課程はこれまで、自立活動と行事で構成されていましたが、学習指導要領改訂を機に試行や検討を重ねています。児童生徒が楽しく、見通しをもって「自ら学ぶ」ための環境としてどのような形態が適しているのか、授業づくりを通して考えていきます。

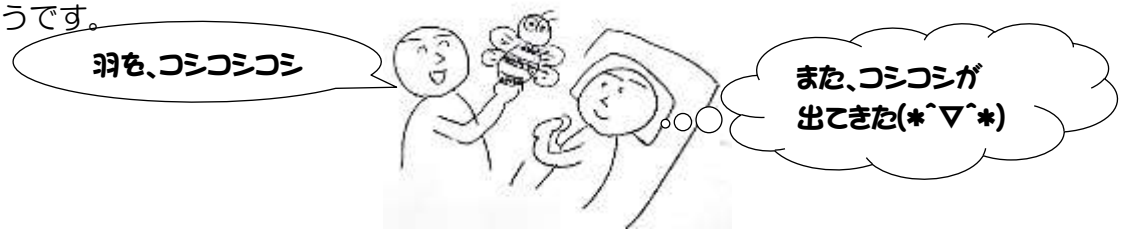
訪問指導やⅢ類型では、物語を題材に国語科の授業づくりを行うことが多くあります。物語の展開を予測し楽しむ、言葉の響きを楽しむ、言葉と物（イメージ）を結び付ける、読み聞かせを聞いて感じたこと表出する、等々幅広い目標設定が考えられます。

学習指導要領総則編（幼・小・中）のＰ３３６～３３７「第２章　第８節　重複障害者等に関する教育課程の取扱いの１の（６）」では、「特に必要がある場合には、幼稚部教育要領に示す各領域のねらい及び内容の一部を取り入れることができることとしている。」しかし、幼稚部教育要領は教科等ではなく領域で示していますので、「教科等として指導を行う際には、目標及び内容の一部を取り入れることができるが、全部を替えることはできないことに留意する必要がある。」と述べられています。

例えば、幼稚園教育の５つの領域「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」のうち、「言葉」の内容にはこのように書かれています。

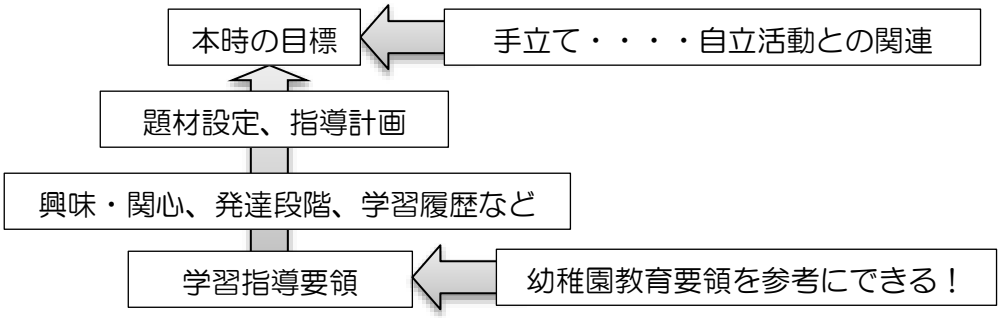
> ≪内容≫（７）生活の中で言葉の楽しさや美しさに気付く。
>
> 言葉はただ単に、意味や内容を伝えるだけのものではない。声として発せられた音声の響きやリズムには、音としての楽しさや美しさがある。例えば、「ゴロゴロ、ゴロゴロ」というように言葉の音を繰り返すリズムの楽しさや、「ウントコショ、ドッコイショ」というような言葉の音の響きの楽しさなどもある。・・・・・言葉の様々な楽しさや美しさに気付くことが、言葉の感覚を豊かにしていくことにつながるのである。

先日、Ⅳグループのミニ授業研を行いましたが、その中で取り扱っていたのがエリック＝カールの「だんまりこおろぎ」です。いろいろな虫が登場し「羽をコシコシコシ」というフレーズが繰り返される物語です。例えば、上記の幼稚園教育要領の一部を取り入れてみると、ストーリーを理解することは難しくても、何度も出てくる「コシコシコシ」という言葉の音の楽しさを感じ取ることを目標にできそうです。



教科の目標や指導内容の設定に悩んだときには、職員室入り口の書庫にある「幼稚園教育要領」を手にしてみてはいかがでしょうか？

（文責：藤原　恵理子）

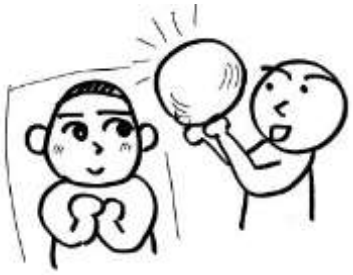


研究だより

No. 7
令和2年 11 月 24 日発行

Ⅲグループ授業研究会より ～算数･数学科について考える～

１０月２７日（火）に高等部１年２組数学科の研究授業を実施し、秋田大学教育文化学部の谷村佳則准教授に指導助言をいただきました。自立活動を主とする学習グループで今年度新設された「算数・数学科」について多くの示唆をいただきました。その中から本号では、「教科の見方・考え方」と「自立活動」についてまとめてみました。



題材名「色々な光」

本題材の目標は「**光の存在に気付く**」（知識・技能）こと、そして光に気付いたならば、そのことを「**表現する**」こと（思考力・判断力・表現力）です。さらに、「光の有無について**自分から教師に伝える**」こと（学びに向かう力、人間性等）としています。

本時のＤさんの目標は、明るさや色、位置を手掛かりにして光があることに**気付き**、そのことを注視や追視、まばたきで**表現する**ことです。この目標では、「～に気付き」の部分が数学的な見方・考え方に当たり、内容は小学部１段階の「数量の基礎」に相当します。

算数・数学科のもっとも基礎となるのは『**事物を対象として捉えること**』ですので、この目標と学習活動は、「数学科」として成立するのです。

また、この事物への気付きは、「有無」や「大きさや形状・量の違い」などにつながっていくことになり、学習する内容に**系統性**があることからも「数学科」となるのです。

本授業は上記のことから「数学科」として成立していますが、授業だけを見てみると「自立活動」のようにも思えます。同じ教材を使って「自立活動」の授業を考えるならばどうなるのでしょうか？

自立活動は、障害による学習上又は生活上の困難を主体的に克服・改善するために、一人一人の実態に応じて学ぶ項目を選定する、つまり**オーダーメイド**の教育です。教科のように指導内容が系統的に配列されているわけではありません。

例えば本題材の「光」で考えてみましょう。身体の動きに制約が多いという実態から、視覚を十分に活用できるようにすることを目的とした「環境の把握」や、光を仲介にして教師と双方向のやりとりをする力を育む「コミュニケーション」の目標を設定することも考えられます。

また、数学科と自立活動を密接に関連付けるならば、どのようになるのでしょうか？

Ｄさんが数学科の目標である「光に気付く」ために、自立活動の時間に学んだ内容を「手立て」として取り入れることができます。例えば、視覚や視野の実態から、見やすい色や大きさ、提示する位置や距離感、点滅の有無、周囲の環境、外部専門家の助言なども手立てに活用できます。このように教科の学習や生活の中で使ってこそ、自立活動の学びが生きてくると言えるのではないでしょうか。

（文責：藤原　恵理子）

研究だより

No. 8
令和2年12月8日発行

こんな時だからこそ！他校の公開研究会に参加してみませんか？

～オンラインや動画配信による研究会がたくさんあります～

今年度は、感染症の影響で県内・県外の研修会や研究会の多くが中止になったり、紙面になったりしています。しかし、後期になってから、オンラインや YouTube 配信などで研究を公開する案内が多く届いています。現地で見て聞いて雰囲気を感じ取ることができれば一番いいのですが、出張に行かずとも、他校の実践に触れるチャンスです！動画配信は、自分の空いている時間を使って見ることができます！これまで届いている案内を紹介しますので、ご参加お待ちしています！

詳しい内容は、これから資料を回覧しますので、じっくりとご覧ください。

◆全職員が視聴できるもの（学校単位で申し込みました）

視聴期間	12/11（金）9：00　～　12/25（金）23：59
研究会名	第 66 回　全国肢体不自由教育研究協議会　埼玉大会
概　　要	大会主題　「肢体不自由教育の充実をとおした共生社会形成の推進」 ～主体的・対話的で深い学びのある教育実践をめざして～ ・１０分科会があり、それぞれ２本の発表と指導助言。 ・文部科学省講話　　特別支援教育調査官　菅野　和彦　氏 ・記念講演　　東京大学先端科学技術研究センター　教授　中邑　賢龍　氏
ログイン	**大会 URL：** https://conference-apps-online.net/web/zenshi2020 **＊上記の URL を右クリック→ハイパーリンクを開く（視聴期間前は「準備中」が出ます。）** **ID　：　●●●●　　パスワード　：　●●●●**
★開催期間であれば、ID 及びパスワードで、いつでも、どこでも（自宅でも）、何度でも視聴できます。 ただし、きらりの職員以外に ID 及びパスワードを教えてはいけません！	

◆全職員が視聴できるもの（申し込み不要）

視聴期間	12/24（木）9：00　～　1/11（月）
研究会名	「特総研初！バーチャル研究所公開」～WEB から見つかる子ども支援のヒント～
概　　要	動画配信、障害毎に「新しい生活様式」をテーマに紹介、教材・教具作成のデモンストレーション等　**★特総研の HP または LINE 公式アカウントからアクセス**

◆申し込みが必要なもの

期日・期間	学校・研究会名	テーマ、主な内容など
1／30（金） 9:30～14:40	秋大附特支　公開研究協議会 オンライン開催	・「生涯教育力」を高める教育課程の編成 ・情報交換、模擬授業、講演など
2／4(木)5(金)	筑波大学附属桐が丘特別支援学校 肢体不自由教育実践研究協議会 Web 開催	・「つながる学び」 ～深い学びの視点からの授業改善 ・授業提示、協議、ポスター発表等
1/19（火） ～2/12（月）	東京都立府中けやきの森学園 オンライン全国公開授業研究会 ・分科会は YouTube 動画配信 ・基調講演は Live 配信 →	・「指導と評価の一体化」 ・分科会Ⅰ～Ⅲ、基調講演等 1/22（金）14:50～16:30
2/26（金） ～3/11（木）	千葉大附属特支　公開研究会 動画配信	・「知的障害児の深い学びをどう支えるか？」 ・研究説明、授業提示、ミニ講義等
2／2（火） ～2／5（金）	国立教育政策研究所教育課程 研究指定校事業研究協議会 オンライン開催	・全国の教育委員会に委託している研究指定校の発表、質疑応答、講評 ・小中学校、高等学校の各教科

研究だより

No. 9
令和3年1月14日発行

オンラインや動画配信による研究会がたくさんあります　part2

2021年がスタートし、ますます感染症対策を要する日々が続いています。
本号では、研究だよりNo．８に続きオンラインや動画配信などによる研究会を紹介します。前号でもお伝えしましたが、こんなときだからこそ出張に行かずとも、他校の実践に触れるチャンスです！動画配信は、自分の空いている時間を使って見ることができます！先月、全国肢体不自由研究協議会の動画を視聴しましたが、聞き逃した部分を再度聞くことができるメリットもあります。
詳しい内容は、資料を回覧しますが、学校名や研究会名で検索をしていただくと、より早く情報が手に入ります。どうぞご検討ください！

◆申し込みが必要なもの

期日・期間	学校・研究会名	テーマ、主な内容など
２／５（金）	東京都立鹿本学園　全国公開研究会 （web開催）14:15～16:50	テーマ「地域の中で主体的に生きる力を育む指導の工夫」 肢体不自由部門、知的障害部門の分科会に分かれての協議会、講演があります
２／６（土）	東京都立光明学園　全国公開研究会 （web開催）10:00～15:40	テーマ「今こそ新たな学びの創造」 ～光明学園の６つのアクション～ 肢体不自由部門・病弱部門の取組の他、健康教育や読書活動の充実などのセミナーと指導助言があります。
２／10（水） ～26（金）	京都市立北総合支援学校　研究発表会 （Youtube動画配信）	テーマ「一人一人の未来社会を見据えた創造的な授業づくり」 ～12年間の学びをつなぐ カリキュラム・マネジメントの実践～ 一木薫教授の講演、ポスター発表による実践報告があります。知的障害の学校です。
２／27（土）	国立特別支援教育総合研究所セミナー （Youtube　Live）9:00～16:25 ＊2/27～3/26オンデマンド配信あり	テーマ「インクルーシブ教育システムの推進」 ～共生社会を目指した新しい時代の特別支援教育を考える～ 記念講演、パネルディスカッション、基幹研究成果報告、ポスター発表などがあります。
１／25（月） ２／18（木） ３／４（木）	徳島県　特別支援教育実践研究報告会 （web開催）15:00～17:00 ＊2/15よりアーカイブ視聴で公開	記念講演、実践報告、パネルディスカッションがあります。アーカイブ視聴を希望する場合も、申込が必要です。

研究だより

No. 10
令和3年1月22日発行

先月の「全国肢体不自由教育研究協議会」動画配信をご覧いただいた方も多いと思います。本号では、その中から、**特別支援教育調査官　菅野　和彦　氏**の文部科学省講話の内容を紹介します。

その１　「研究」と「教育課程」

今年度の本校の研究では『先生方一人一人の授業づくりが教育課程の改善につながる』（カリキュラムマネジメントの実現）ことを度々お伝えしています。講話の中では次のようなお話がありました。

「学習指導」だけでなく**「学習評価」もカリキュラムマネジメントの中核的な役割**をになっている。
「学習評価」を学校教育全体のＰＤＣＡサイクルに位置付けることが大事。

Plan
秋田きらり支援学校の教育課程の下で**各種指導計画を作成**

Do
各種指導計画に基づく
授業（学習指導）を実施

Check
実施した授業における
児童生徒の学習状況を評価

Action
評価結果を**改善に生かす**
・児童生徒：学習の改善
・教師：指導の改善
・学校全体：教育課程の改善
・組織運営等の改善

学習評価の結果（Check）を教育課程の改善（Action）に生かすということは・・・・・・

例えば　（学習評価）ある教科の資質・能力が十分身に付いていない
→（教育課程）その教科の授業時数を増やす、指導計画を見直す、など

例えば　（学習評価）言語能力の育成が図られていない
→（教育課程）教科と横断的な視点から各教科における言語活動の再検討を行う

こうした改善を踏まえて、Ｐlan→Ｄo→・・・と学習指導が展開されていく。

本校では、今年度の研究副題である「何を学ぶか」「何が身に付いたか」について、研究グループ毎に具体的なテーマをもって検討を重ねています。その成果や課題、改善策が、先日の教育課程検討委員会の中でも話題となっていました。今年度はどの研究グループも「目標設定」に焦点を当てた研究に取り組み、次年度は「学習評価」を取り上げる予定です。そうすることで、より教育課程の改善に密接に関連付くと考えられます。

菅野調査官の講話を受けて本校の研究を振り返ってみると、**研究の取組が教育課程の改善に生かされている**と実感できるのではないでしょうか。

教育課程の要素・・・「学校目標の設定」「指導内容の組織」「授業時数の配当」です。

研究だより

No. 11
令和3年2月 12 日発行

「全国肢体不自由教育研究協議会」動画配信より、前号に引き続き、特別支援教育調査官　菅野　和彦　氏の文部科学省講話の内容を紹介します。

その２　「自立活動」と「各教科等」との関連

「自立活動を主とした教育課程」における、自立活動と教科の考え方について、お話がありました。本校でも、昨年度から教育課程を大きく見直しているので、大変参考になります。

悩みの多くは・・・・・
『自立活動と教科の違いが不明確』
『教育活動全体を通じた自立活動と教科の関連が曖昧』
『自立活動と小学部１段階の教科指導のとの関連や考え方とは？』

例：身近な素材（木の葉、小枝、小石等）で秋を表現する学習

＜図画工作科の目標ならば・・・＞
木の葉をちぎる、小石を並べる、材料を組み合わせる等しながら、思いついたことを表現する。

＜自立活動の目標ならば・・・＞
目と手を協応させ、木の葉や小石を指先でつまむ、移動させる、並べる。

このように、同じ木の葉、小枝、小石を素材とした指導内容であっても、図画工作科としての表現活動に必要な技能の育成を目指した授業と、自立活動としての上肢の動きや目と手の協応動作の向上を目指した授業では、指導目標と学習評価は明らかに違います。**何を身に付けさせることを目的とした授業なのかを明確に**し、指導の結果の評価に基づいて授業を振り返り、教育課程の改善につなげていくことが重要です。

自立活動の指導と小学部１段階の教科指導について悩んだ場合は、指導目標を何に基づいて設定していたのかを確認したり、自立活動ははじめから集団で指導することを前提に個別の指導計画は作成されないなど、自立活動の基本を確認したり各教科と自立活動の目標設定に至る手続きの違いを踏まえて、何が身に付いているかという評価を大切にしていくことが大切です。このような視点でもう一度授業を見直してみることが、教育課程を考えるきっかけとなります。

なお、各教科等と自立活動の個別の指導計画を作成するにあたっては、下の図のように大きな違いがあることを踏まえ、密接な関連を保つことが必要になります。具体的には、各教科等の指導目標を達成するために、具体的な配慮や手立てに自立活動を生かすことです。　（文責：藤原恵理子）

個別の指導計画

各教科等は、各教科の目標及び内容が学習指導要領に規定されている。それらの指導計画を具体化し、きめ細やかに指導するために作成。

自立活動は、各教科のように内容のすべてを取り扱うものではなく、個々の実態に応じて指導すべき課題を明確にし、必要な項目を選定し、具体的な指導内容を設定して作成。

研究だより

No. 12

令和3年2月 18 日発行

「東京都立府中けやきの森学園（知肢併設）全国公開授業研究会」動画配信より、基調講演の内容を紹介します。特に、今年度のⅠグループ研究副題「～自分の考えを生かした目当てを設定し、学んだことを実感できる授業づくり～」の参考になりそうです¥^

【基調講演テーマ】　　新学習指導要領を踏まえた「学習評価の工夫」
講師　：　神戸親和女子大学　　教授　武富　博文　氏

この中から、**中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会「児童生徒の学習評価の在り方について（報告）」**（平成 31 年１月 21 日）の解説を取り上げます。全文は文部科学省ＨＰで閲覧できます。

各教科の目標や内容は、知識及び技能、思考力・判断力・表現力等、学びに向かう力、人間性等の三つの柱で示されていますが、観点別学習状況の評価に際しては、思いやりや優しさと行った人間性等は教科学習の中で評価対象にするのが難しいことから、知識・技能、思考・判断・表現、主体的に取り組む態度としています。本校の研究主題と照らし合わせたときに、主体的に取り組む態度の見取りはとても大切になります。

主体的に取り組む態度の評価の基本的な考え方について、（報告）にはこのように書かれています。

> 知識及び技能を獲得したり、思考力、判断力、表現力等を身に付けたりするために、自らの学習状況を把握し、学習の進め方について試行錯誤するなど自らの学習を調整しながら、学ぼうとしているかどうかという意思的な側面を評価することが重要である。

> 学習に関する自己調整を行うために、自己目標の設定、自己評価や相互評価を授業の中に取り入れる等、工夫をすることが大切です。

Ⅰグループ研究では、まさに「**自己目標の設定**」を通して自ら学ぶ姿を目指した授業づくりに取り組み、児童生徒又は各教科の特性に応じて、様々な工夫と改善を重ねてきました。主体的に取り組む態度の評価の方法については、（報告）の中で次のように述べられています。

> 発達の段階に照らした場合には、児童自ら目標を立てるなど学習を調整する姿が顕著にみられるようになるのは、一般に抽象的な思考が高まる小学校高学年以降からであるとの指摘もあり、児童自ら学習を調整する姿を見取ることが困難な場合もあり得る。・・・・・・・（中略）・・・・・・・・・・小学校低学年・中学年段階では、例えば、学習の目標を教師が「めあて」などの形で適切に提示し、その「めあて」に向かって自分なりに様々な工夫を行おうとしているかを評価することや、他の児童との対話を通して自らの考えを修正したり、立場を明確にして話していたりする点を評価するなど、学習評価の工夫が求められる。

そして、評価規準や評価方法等を児童生徒と共有することが重要であると述べられ、その際には、

> ・学習の見通しとして学習の計画や評価の方針を事前に示す
> ・特に小学校低学年の児童に対しては、学習の「めあて」などの分かり易い言葉で伝える

などの工夫が求められています。本号で紹介したのは、ほんの一部ですので、詳しくは文部科学省ＨＰでぜひご一読ください。

（文責：藤原恵理子）

Ⅱ　各研究グループの実践

・Ⅰグループ（準ずる各教科等を学習するグループ）

・Ⅱグループ（知的代替の各教科等を学習するグループ）

・Ⅲグループ（主として自立活動を学習するグループ）

・Ⅳグループ（訪問指導の学習グループ）

Ⅰグループ研究（準ずる各教科等を学習するグループ）

1　グループ研究テーマ

児童生徒が「自ら学ぶ」姿を目指して ～自分の考えから「めあて」を設定し，学んだことを実感できる授業づくり～

2　副題について

児童生徒が「自ら学ぶ」姿を目指すために，本グループでは，児童生徒の興味や疑問，気付き，知りたいこと等を生かして授業の「めあて」を設定し，それに基づいた学びを実感できるまとめを大切にした授業づくりを行う。１年目は特に授業の「めあて」の設定，２年目は「めあて」の設定とまとめに重点を置いて取り組んでいく。

それにより，授業で学ぶことが明確になり，児童生徒が主体となって学習に取り組もうとするのではないか。また，自ら「めあて」を設定したり，まとめとして振り返ったりすることで，自分の考えを表現する力が高まるのではないかと考える。

3　研究仮説

児童生徒の興味や疑問，気付き，知りたいこと等（以下,「発信」とする）を生かして，授業の「めあて」を設定する。それにより，自主的・主体的に課題解決に臨み，解決できた達成感や満足感から学びをより実感することで，学ぶことへの意欲を高め,「自ら学ぶ」姿が見られるだろう。

4　研究の方法と内容

今年度は研究１年目として，以下のことに取り組む。

(1) 授業づくりに関する研修

・授業において使用する用語の整理（「めあて，目標，学習課題」,「まとめ，振り返り」）

・「児童生徒の発信を生かした授業の「めあて」の設定」に関する研修

（一人一人の授業づくり〔特に導入場面〕の紹介，教育専門監の授業による研修　他）

(2) 授業実践と評価・改善

・８年経過研修を兼ねた授業研究会の実施（小学部：算数科，中学部：社会科）

・グループ内での授業参観または DVD 視聴による授業の評価と改善案の検討

5　研究計画

月日	研究・研修	主　な　内　容
5/15	グループ研究会①	研究内容について，算数・数学科についての研修
6/16	グループ研究会②	研修（授業の導入に関する語句について）
7/14	グループ研究会③	研究概要について，研修（教育専門監　授業 DVD より）
8/27	グループ研究会④	研修（教育専門監　授業 DVD より）
9/29	グループ研究会⑤	グループ内 授業研究会（中学部１・２－３・社会）
10/26	グループ研究会⑥	グループ内 授業研究会（小学部４－３・算数）
11/25	グループ研究会⑦	授業実践の中間評価（「自ら学ぶ」姿と手立てについて）
12/17	グループ研究会⑧	グループ研究の評価，目指す「自ら学ぶ」姿の評価， 題材の評価，改善
1/19	グループ研究会⑨	グループ研究のまとめと次年度への課題
2/16	グループ研究会⑩	グループ研究のまとめと次年度への課題 単元・題材の評価，目指す「自ら学ぶ」姿の年度末評価

６　研究実践

(1) 授業づくりに関する研修

年度当初，グループ内で取り組みたいことを話し合い，児童生徒の発信を生かした「授業のめあて」を設定することについて意見交換を行った。実践経験が少ない内容でもあることから，導入に時間を要するのではないか，少人数の授業では児童生徒の発信を毎時間，引き出すのは難しいのではないか等の意見もあったが，小・中学校の取組を参考にしながら自主的・主体的に学ぶ姿につながるよさを共有して挑戦してみることとした。また，その実践に向けて，小・中学校の教科の授業を参考にした研修を行うこととした。

1) 授業づくりに関する用語の整理

「めあて」の提示の仕方について，小・中学校の略案を見ながら各自の授業実践について意見交換をした。その中には，「めあて」と「目標」，「学習課題」と「問題」等の類似した語句が授業によって使い分けられていたため，それらの意味や使い方等を他県の資料を参考にしてグループ内で整理した。

その結果，本研究では「めあて」と総称しているものは，「目標」「学習課題」と置き換えられること，その意味としては「授業において児童生徒が学習への見通しや意欲をもつためのもの」「教科や学習活動等に応じて使い分ける」ということを確認した。

語　句	意味・使い方　他
ねらい	教師の立場で示すもの
めあて	ねらいを児童生徒の立場で示すもの 学習の見通しをもたせ，意欲を高めるもの 目指す「活動のゴールの姿」「ゴールとそれまでの道筋」を示すもの
目　標	めあてと同じような意味
学習課題	授業で解決すべき事柄 ・「なぜ～なのか？」等の児童生徒が追究したくなるもの ・様々な意見が出る，疑問が生まれるもの
学習問題	授業で取り組む問題 ・算数・数学では「～を求めましょう」「～を計算しなさい」

2) 教育専門監の授業ＤＶＤによる研修

小・中学校の教科指導に関する様々な情報を発信している『秋田県学力向上支援 web』を活用し，教育専門監の授業の DVD をグループ内で視聴した。小学校の国語，算数，音楽，中学校の社会，数学等の複数の教科や様々な学年の授業を見ながら，導入部分を中心に研修を行った。

「教師の働き掛けでよい点」，「自分の授業に生かせそうな点」を互いに出し合い，その後の授業づくりの参考にした。それらから「めあて」の設定に関すること，授業全体に関することに整理してまとめたものを以下に示す。

授業 DVD による研修の様子

自分の授業に生かせる働き掛けや工夫
★「めあて」の設定に関すること ・キーワードを考えることができるように，「めあて」を穴埋め式にする。 ・本時の学習課題に児童生徒が気付くことができるように，実物や図表等を導入で提示する。

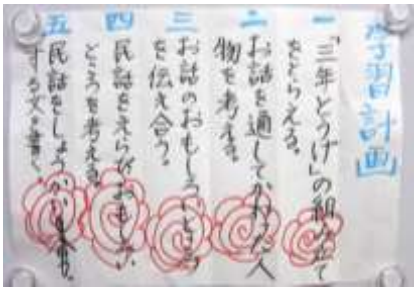
・児童生徒にとって身近な事柄や興味関心の高い内容を取り入れる。 ・既習事項や前時の振り返りから本時の「めあて」に結び付けるようにする。
★授業全体に関すること ・経験をもとに，発言できるような手掛かり（絵，写真等）を提示する。 ・教師が子どもの目線に立って一緒に悩んだり，あえて間違えたりして，子どもの気付きを生むようにする。 ・子どもの発言を丁寧に受け止める。 ・子どもからの発信にすぐに「正解」の反応をせず，「どうして？」「本当に？」など，さらに考えを深められるような発問をする。

(2) 授業実践と評価・改善

今年度は互いの授業を見合う機会をほとんど設定できなかったが，グループ内の授業研究会を中心に，各自の実践について情報交換を行った。「めあて」の設定について協議するとともに，児童生徒の自主的・主体的な姿につながる学習活動や手立てについて協議し，授業改善を行った。そこで，話題となったいくつかの事例を以下に示す。

1) 各自の授業実践から

高等部３年３組　地理Ａ　（生徒３名）
＜「授業のめあて」の設定に関して＞ ・授業の始めに本時の内容を提示し，<u>「今日，学びたいこと」を生徒が考える</u>。各自の「学びたいこと」を尊重し，各自の目標をもって授業を進めた。 →　<u>調べ学習には有効</u>であり，<u>意欲が喚起でき，主体的な姿</u>が見られている。反面，調べていくうちに目の前の事柄で精一杯になり，<u>目標からそれてしまうのが課題</u>である。
＜自主的・主体的な姿に関して＞ ・<u>調べ学習では，上記のような授業スタイルの方が能動的</u>であった。 ・覚えなければならない用語が多い教科のため，<u>講義形式の授業も必要</u>である。

小学部３年３組　国語科　（児童１名）
＜「授業のめあて」の設定に関して＞ ・単元のはじめに，<u>単元全体で学習することを見通す時間</u>を設定し，「学習計画」を作成した。その学習計画表から本時の学習内容が分かり，それを参考にして<u>自分で「めあて」を考えようとする</u>姿が多く見られた。 →　どんなことをどんな流れで学習するのかが分かることで，<u>教師がねらっていることと大きくそれることなく，「めあて」をもって自主的に学ぼうとする姿</u>につなげることができた。 

2) グループ内での授業研究会から

中学部１・２年３組　社会科　単元名「北アメリカ州」　令和２年９月２５日実施
＜主な内容＞ 北アメリカ州と日本の農業とを関連させ，日本の食料自給率を上げることが可能かどうかについて資料を参考にしながら考え，意見を発表し合う。　※中１（２名）と中２（１名）の合同授業
＜協議より＞ ・導入の時，前時までの意見をまとめたワークシートをもとに，生徒たちからキーワードを引き出し，「学習課題」として設定した。 →　<u>前時までの学習を想起させ，本時の学習につなげられ</u>ていて良かった。

・まとめの時に，本時には「学習課題」と別に「隠しめあて」があることを生徒に伝え，生徒からの言葉で「めあて」を整理しようと試みた。
→　「隠しめあて」は，まとめの意味合いもあったので，**まとめをしっかり行い，新たな疑問を次時の「めあて」につなげられる**とよい。
・自分の意見をまとめるために，教科書の他，資料集やタブレット等の複数の方法から選択する場を設定したり，視聴覚教材を準備したりした。
→　合同授業において**生徒同士のやりとりの場面を多く設定するためには，**意見交換の材料として全員が**同じ資料を使う**とよいのではないか。

小学部４年３組　算数科　　単元名「面積」	令和２年１０月２６日実施

＜主な内容＞
１㎠の面積を応用し，長方形の面積の求め方を考えて説明する。また，「長方形の面積は縦の長さ×横の長さ」であることを理解する。

＜協議より＞
・導入では，前時までの振り返りも兼ねながらクイズを提示した。また，その後に本時で取り組む問題を提示し，児童と「めあて」を確認した。
→　**導入でのクイズは児童の意欲付けに効果的**であり，自信をもって答えを発表していた。「どうして？」「考え方を教えて」など，**児童の発言を丁寧に掘り下げていくことで，本時のねらいでもある「どのように求めるか」にもつなげる**ことができたのではないか。
・情報機器，教師が用意した複数の意見，プリントや図形カード等，多くの教材を用意した。
→　図形については，児童が手元で操作するものは実際の長さ，提示用は拡大して見やすいものという使い分けが必要である。また，児童の実態から考えると，**説明の際にヒントとなる話型カードの活用，操作的な活動の設定，考えを整理する時間の確保**も必要である。

7　まとめ

(1) 成果

・導入において，児童生徒から出てきた言葉をもとに「めあて」を設定することで，「めあて」をより意識して授業に向かおうとする気持ちが高まり，自分の言葉で学んだことをまとめようとするなど，自主的な姿が多く見られた。
・小中学校の授業ＤＶＤによる研修を通して，特に導入場面に関して自分の授業と比較したり，視点を変えて授業づくりを行ったりすることができた。
・単元のはじめに学習計画を立てると児童生徒が毎時間の見通しをもち，「めあて」を設定しやすくなった。また，本時のまとめや振り返りを丁寧に行い，それらを次時につなげることで，児童生徒が「めあて」について積極的に発言するようになった。

(2) 課題と次年度に向けて

・児童生徒とのやりとりから丁寧に発信を聞き取って「めあて」の設定を行うには時間が必要である。そのため，授業の展開部分に時間が不足する可能性もあり，毎時間の授業では取り組むには難しかった。教科や学習内容等による取り組みやすさもあることから，単元計画を立てる段階から，一つ一つの授業について児童生徒の発信から「めあて」を設定することが有効かどうかを検討していきたい。
・「めあて」の設定に焦点を当てた取組を通して，児童生徒が「何が分かったか」，「何ができるようになったか」を言葉で表現できるようなまとめや振り返りの大切さを再確認した。そのために，教師は目の前の児童生徒の実態を踏まえ，毎時間のねらいをよく吟味することや目指す児童生徒の姿をより明確にすることを大切にしていきたい。

Ⅱグループ研究について

（知的代替の各教科等を学習する学習グループ）

１　グループ研究テーマ

児童生徒が「自ら学ぶ」姿を目指して～「学びの履歴シート」を活用して

２　副題について

児童生徒の「自ら学ぶ」姿を目指すために，本グループでは，児童生徒の各教科の学習状況及び「何を学ぶか」を整理し，「学びの履歴シート」（※）を用いて各教科や合わせた指導の中で指導の根拠を明確にした授業実践を行う。それにより，適切な指導目標や指導内容の設定ができ，各教科と合わせた指導との関連が明確な授業実践ができるのではないかと考える。また，指導の根拠を明確にすることで，教師は分かりやすく目標や指導内容を示すことができ，児童生徒自身が「何を学ぶか」を明確に意識しながら意欲的に学習に向かう姿，「自ら学ぶ」姿を引き出すことができると考える。

（※）は，特別支援学校学習指導要領に基づいて，各教科の学習状況を整理・把握し，児童生徒が学ぶ内容を明確にしてつないでいくことを目的に，福島県特別支援教育センターで平成元年度に作成したもの。

３　研究仮説

指導計画の作成において，「学びの履歴シート」を用いることで「何を学ぶか」が整理され，指導の根拠や，各教科と合わせた指導との関連を明確にした授業実践ができるだろう。また，それにより，児童生徒自身が目標や学習内容を理解して意欲的に学習に臨む姿が期待できるだろう。

４　研究方法と内容

今年度は研究１年目として，以下のことに取り組む。

（１）中心単元検討会の実施

（２）「学びの履歴シート」を使った各教科の内容のチェック

（３）授業計画，実践

１）兄弟学級による授業実践の報告と情報共有（全学級）

２）グループ授業研究会（1 学級）

５　研究計画

期日	研究・研修	主な内容
～５月	中心単元検討会	各教科と合わせた指導の関連を多面的な視点から検討
5/15	グループ研①	グループ研究の方針を共通理解
6/15	グループ研②	「学びの履歴シート」の記入の実際について研修
7/14	グループ研③	研究概要について
夏季休業中		各学級で「学びの履歴シート」の作成→授業計画の立案
9/16	授業研究会	高等部１年１組生活単元学習授業研究会
9/29	グループ研④	兄弟学級での授業実践報告①
11/25	グループ研⑤	〃　②
12/17	グループ研⑥	グループ研究の評価
1/25	グループ研⑦	グループ研究のまとめと次年度への課題
2/16	グループ研⑧	グループ研究のまとめと次年度への課題

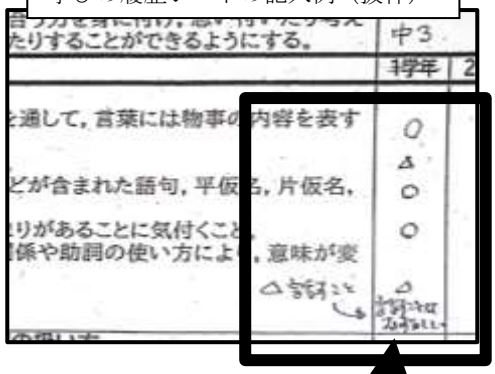
６　研究実践

（１）中心単元検討会の実施

前年度担任が作成した合わせた指導に関する資料（どのような学習をしたのか，国語科，算数・数学科，生活科等で次年度ねらいたいこと）を基に，今年度の合わせた指導でどのようなことを行うのかを担任以外の教師と検討する会を実施した。担任，各学部主事，研究主任，教育専門監が参加し，各教科とどのように関連しているのか，何を学ぶのか等について意見を出し合った。

（２）「学びの履歴シート」を使った各教科の内容のチェック

学びの履歴シートの記入例（抜粋）



【「学びの履歴シート」記入の実際についての研修】

各学級で児童生徒を抽出し，国語科，算数・数学科の学習状況を「学びの履歴シート」に記入し，意見交換をした。

＊記入に当たって
～学習した内容は○
～その内容をおおむね習得している場合は◎

記入後，次のような意見が挙がった。

・教科の視点で考えていく上で参考になる。
・指導要領の内容が一覧になっており，「何を学ぶか」を整理するための資料として有効である。
・引き継ぎの際によい。
・目標設定の仕方が大切になる。
・○や◎の評価に曖昧さがあり，記入の仕方に難しさを感じる。
→◎や○の表記だけでなく，△の表記も用いて，特別な場合において追記で説明すると評価しやすく，記入しやすかった。（実態的に達成が難しい，機能的に習得が難しいと思われるものに△を付け，欄外などに内容を補足している。）

研修から

「学びの履歴シート」の作成について，今年度は下表のようにすることとした。

学部	「履歴シート」作成の実施教科	対象児童生徒
小	全教科	全児童
中	国語，数学 （＋中心単元に関わる教科）	抽出生徒
高	国語，数学，社会	抽出生徒

（３）授業計画・実践

１）兄弟学級による授業実践の報告と情報共有

学部を超えた２学級ずつを兄弟学級として構成し，「学びの履歴シート」を活用した授業計画，実践を紹介し合う研究日を設定した。「学びの履歴シート」を授業に活用する際によかったポイント，悩んだポイントについて情報交換を行った。

＜よかったポイント＞
・取り扱っている内容と取り扱っていない内容が分かる。
・学びの履歴シートだけでなく，到達度チェックリストも使うのがよい。
・単元計画に役立つ。学習の理由付けや学習の根拠としてよい。
・教科的観点を踏まえるためによい。

＜悩んだポイント＞
・◎，○，△では評価の幅が広いので追記が必要。評価の仕方を検討する必要がある。
・小単元の目標が教科よりだと評価しやすい。
・授業後に学びの履歴シートと関連させる必要がある。
・個別の指導計画でねらっていることとのリンクが見えづらい。

２）グループ授業研究会（高等部１年　生活単元学習　「秋田県の見所を紹介しよう２
～秋田紹介動画の制作～」より）

以下のように「学びの履歴シート」を活用し，授業計画や支援内容を検討し授業を行った。

【学びの履歴】各教科

特別支援学校小学部・中学部学習指導要領(H29) P89～95参照

小学部【国語】１段階

目 標

知識及び技能	思考力・判断力・表現力等	学びに向かう力・人間性等
ア 日常生活に必要な身近な言葉が分かり使うようになるとともに，いろいろな言葉や我が国の言語文化に触れることができるようにする。	イ 言葉をイメージしたり，言葉による関わりを受け止めたりする力を養い，日常生活における人との関わりの中で伝え合い，自分の思いをもつことができるようにする。	ウ 言葉で表すことやそのよさを感じるとともに，言葉を使おうとする態度を養う。

	内 容	1学年	2学年	3学年	5学年
知識及び技能	ア 言葉の特徴や使い方 (ア)身近な人の話し掛けに慣れ，言葉が事物の内容を表していることを感じること。◎ (イ)言葉のもつ音やリズムに触れたり，言葉が表す事物やイメージに触れたりすること。◎	◎			
知識及び技能	イ 我が国の言語文化 (ア)昔話などについて，読み聞かせを聞くなどして親しむこと。◎ (イ)遊びを通して，言葉のもつ楽しさに触れること。 (ウ)書くことに関する次の事項を理解し使うこと。 ㋐ いろいろな筆記具に触れ，書くことを知ること。○ ㋑ 筆記具の持ち方や，正しい姿勢で書くことを知ること。 (エ)読み聞かせに注目し，いろいろな絵本などに興味をもつこと。◎	○			
思考力・判断力・表	A 聞くこと・話すこと ア 教師の話や読み聞かせに応じ，音声を模倣したり，表情や身振り，簡単な話し言葉などで表現したりすること。○ イ 身近な人からの話し掛けに注目したり，応じて答えたりすること。○ ウ 伝えたいことを思い浮かべ，身振りや音声などで表すこと。○	○			

身近な人から話し掛けられることには慣れていて，しっかり聞いているね。

簡単な質問の内容はきちんと理解できているよね。

身近な人からの問い掛けに自分なりの方法で答えられたら会話が広がるかも・・・
卒業後の生活にも必要な力だよね。

友達とペアになり，写真等を使いながら自分の考えを伝え，話合う場面を設定した。

本時の目標(指導案より抜粋)

	本単元における実態	本時の目標	手立て MS ゴシック：自立活動シートより
B (男)	・秋田の食への関心が高い。調べたいことをタブレットに表示される数枚の画像から指差しで伝える。	・紹介動画用の画像を教師と一緒に選び，どの画像を使うか友達とやり取りしながら決める。	**・自分で紹介用の画像が選べるように，事前に同じテーマに添った画像を２～３枚準備しておく。**

学習過程(指導案より抜粋)

学　習　活　動	指導上の留意点 MS ゴシック：自立活動シートより
２　グループに分かれて，友達と紹介動画を制作する。	**・Ｂが紹介動画用の画像を選べるように，タブレット端末やガイドブックを活用して「〇〇と〇〇どっちがいい？」など，指差しや簡単な言葉で答えられる問い掛けをする。**

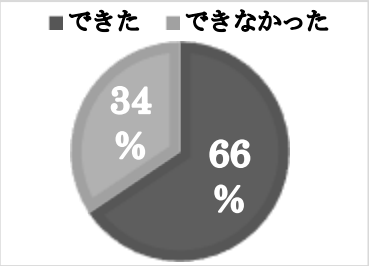
７　まとめ

教職員に行ったアンケートにより，次のように成果と課題をまとめた。

＜アンケートから～「学びの履歴シート」を使ってみて＞

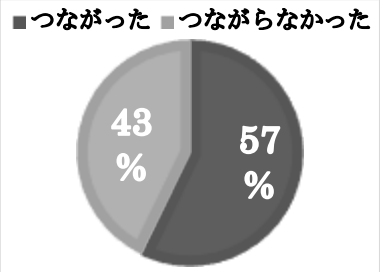
Ⅱグループの教師へアンケートを行い，①履歴シートを使った授業ができたか，またそれが②「自ら学ぶ姿」へつながったのかという質問を行った。

①　履歴シートを使って授業ができたか？



「できなかった」理由について
- 記入時期が遅かった。
- 使う必要がなかった。
- 子どもの実態から授業を考えた。
- 他の資料を参考にした。
- 履歴シートがまだ使える段階にない。
- 振り返りの時期になってからチェックした。

②　それは「自ら学ぶ姿」につながったか？（←①で「できた」と答えた教師に）



「つながった」理由について
- 学ぶことがはっきりし，子どもがゴールまでの見通しをもてた。
- 学ぶ意欲が見られた。
- 学ぶ目的が分かる。
- 子どもも教師も学びに系統性をもてる。
- 授業を組み立てる視点が広がった。

「つながらなかった」理由について
- シートが直接要因になっているとは言えない。
- 履歴シートの積み重ねが足りないため分からない。

（１）成果

- 「学びの履歴シート」を作成したことで，学びの段階が分かり指導内容が焦点化できた。また，系統性を意識して授業を組み立てることができ，教師自身の「授業でねらいたいこと」が明確になった。
- 何ができているか，繰り返し取り組んでいるが◎にならないものは何かなど，今後積み重ねたい指導内容を検討できた。
- 新年度，新しい学級の担任になった際の児童生徒の学びの履歴を知る資料となり得る。
- 児童生徒自身にとって「何を学ぶのか」が明確になってゴールまでの見通しをもつことができ，自ら学ぶ姿につながる意欲が見られるようになってきた。

（２）課題

- 「学びの履歴シート」を活用するには，まだ積み重ねが足りない。いつ，誰が，どのようにチェックし，どう生かすのか確認が必要であった。
- 何ができて何ができつつあるのか分かりやすいように，シートの評価記載について工夫が必要であった。（補足欄，記号など）。
- 「学びの履歴シート」を活用することが「自ら学ぶ」姿にどのようにつながっていくのか。現段階では実態把握には有効だが，つながりが見えづらい。

（３）次年度に向けて

- 「学びの履歴シート」を活用して学習履歴の情報を積み重ねていくことで，授業計画を立てる上でより有効なツールとなると考える。来年度も継続したい。また，「学びの履歴シート」をよりよく活用していくために，チェックする時期を検討，設定したい。
- 「学びの履歴シート」から，「できつつある」「未履修だが，これはできそう」という目標や内容を学習計画に反映させ，授業を積み重ねて，自ら学ぶ姿になったかどうかを評価していきたい。
- 「学びの履歴シート」がどのように「自ら学ぶ」姿につながっていくのか，研究の道筋をより分かりやすく提示し，共通理解につなげたい。

Ⅲグループ研究（自立活動を主として学習するグループ）

１　グループ研究テーマ

児童生徒が「自ら学ぶ」姿を目指して
～算数・数学科の視点からの実態把握と根拠のある目標設定～

２　副題について

児童生徒の「自ら学ぶ」姿を目指すために，本グループでは，チェックリストを使用し，算数・数学科の視点から学びの状況を確認して児童生徒の実態把握を行い，目標や指導内容を検討して授業づくりを行う。実態把握や根拠のある目標設定を行うことにより,より一人一人の課題にせまった指導内容の検討や手立ての改善を行うことができる。そのことにより，活動に興味をもつ，やるべきことが分かって活動に向かったり行動したりする，感じたことを自分なりの方法で表現するなどの「自ら学ぶ」児童生徒を育てられると考える。

３　研究仮説

算数・数学科の視点から実態把握を行い，根拠のある目標を設定し，指導内容や手立ての改善を重ねる。そのことにより，児童生徒一人一人の課題にせまる授業改善ができるだろう。また，児童生徒は自分のやるべきことが分かって活動に向かったり，行動したりする「自ら学ぶ」姿が見られるだろう。

４　研究方法と内容

今年度は研究１年目として，以下のことに取り組む。

（１）チェックリストを使用した実態把握と根拠のある目標設定

・実態把握と目標設定を協議の柱としたＤＶＤによるミニ授業研究会の実施
・(※)「学習到達度チェックリスト」を使用した実態把握と目標設定についての学習会
　（※）は,「障害の重い子どもの目標設定ガイド　徳永　豊　編著」より活用

（２）「自ら学ぶ」姿を目指した算数・数学科の授業改善

・児童生徒一人一人の「自ら学ぶ」姿の検討，評価，見直し
・定期的な目標，指導内容，手立ての見直しと改善点の明確化
・授業実践の紹介や算数・数学科の授業研究会の実施

５　研究計画

月日	研究・研修	主　な　内　容
5/15	グループ研究会①	研究内容について，算数・数学科の研修
6/16	グループ研究会②	算数・数学科の実践紹介
7/14	グループ研究会③	研究概要，ミニ授業研（小学部２－２Ｂ・算数）
8/27	グループ研究会④	研究概要,「学習到達度チェックリスト」の学習会
9/29	グループ研究会⑤	目指す「自ら学ぶ」姿の評価，題材の評価
10/27	グループ研究会⑥	授業研究会（高等部１－２・数学） 指導助言：秋田大学教育文化学部 准教授 谷村佳則氏
11/25	グループ研究会⑦	授業研究会（小学部１－２・算数)，題材の評価，改善
12/17	グループ研究会⑧	グループ研究の評価， 目指す「自ら学ぶ」姿の評価，題材の評価，改善
1/19	グループ研究会⑨	グループ研究のまとめと次年度への課題①
2/16	グループ研究会⑩	グループ研究のまとめと次年度への課題②

6　授業実践

（１）チェックリストを使用した実態把握と根拠のある目標設定

１）実態把握と目標設定を協議の柱としたミニ授業研究会

７月にＤＶＤ視聴によるミニ授業研究会を実施した。実態を踏まえ，学習指導要領の目標や内容に沿った算数・数学科の指導ができているか意見を出し合った。

【提示授業】小学部２年２Ｂ組　算数科　　題材名「なにかな　どこかな」
【話題になったこと】様々な教材や環境で取り組み，行動を細かく見て実態把握し，目標を設定する。
【ミニ授業研究会後の授業改善と児童の変容】

ミニ授業研究会から	改善したこと	児童の変容
・具体物を隠し，具体物の有る，無しに気付くことをねらうのであれば，具体物を捉えた状態から具体物が隠れる場面を設定することが必要。	・目標を「効果音や具体物の一部をヒントに，具体物が隠されていることに気付く」に変更。児童の目の前で具体物を隠す場面を設定。	・効果音を聞いたり具体物の一部が見えたりしたときに，児童の表情が変わったり，探そうと手を伸ばしたりする様子が見られた。

学習到達度チェックリストは，今年度の担任がチェックしている児童生徒と昨年度の担任のチェックのままの児童生徒がいた。より具体的な目標設定のために今年度の担任が再チェックし，児童の行動を細かく把握する必要があった。また，チェックする際は複数の目でより客観的な視点から児童生徒の行動を見る必要性も確認できた。

２）学習到達度チェックリストの学習会

グループ研究の研修として学習会を行い，発達段階の意義を確認し，事例演習を実施した。学習会終了後に各学習グループで，児童生徒一人一人についてチェックリストを再チェックし，後期の目標や指導内容，手立ての改善を行った。実施後の職員のアンケートは以下のとおりである。

・学習会後，統一したスコアの見方ができた。
・複数の目で見ることで，実態に合った指導ができた。
・目標設定，子どもの実態に合った教材の準備，提示の仕方ができた。

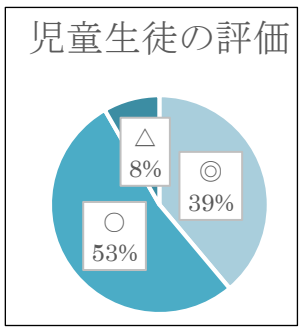
学習会の実施により，学習到達度チェックリストの活用について具体的に把握し，再チェックをして，授業実践に生かした。実態把握を細かく行うことでより具体的な目標を立てられるようになり，指導内容や手立ての改善にもつながったと考える。

（２）「自ら学ぶ」姿を目指した算数・数学科の授業改善

１）児童生徒一人一人の目指す「自ら学ぶ」姿の検討と評価

算数・数学科における一人一人の目指す「自ら学ぶ」姿を検討した。９月に中間評価と目標の見直しを行い，12 月に年度末評価を行った。評価は，昨年度の３段階評価を継続し，「十分達成→◎，概ね達成→○，○の評価に満たない→△」とした。

【年度末評価における児童生徒の変容】
◎，○の評価を合わせると，９２％の児童生徒に変容が見られた。
【◎だった児童生徒の変容のエピソード】
児童Ａの目標：50 ㎝離れた位置に提示された物を見て，好きな色や大きさなどを選んで，手を伸ばして触る。
評価：学習を繰り返したことで，１ｍ離れたところへも視線を向け，手を伸ばした。
生徒Ｂの目標：光や物の存在に気付いて，目を開けたりまばたきをしたりする。
評価：提示された光の色が変化するたびにまばたきをして，教師に伝えた。

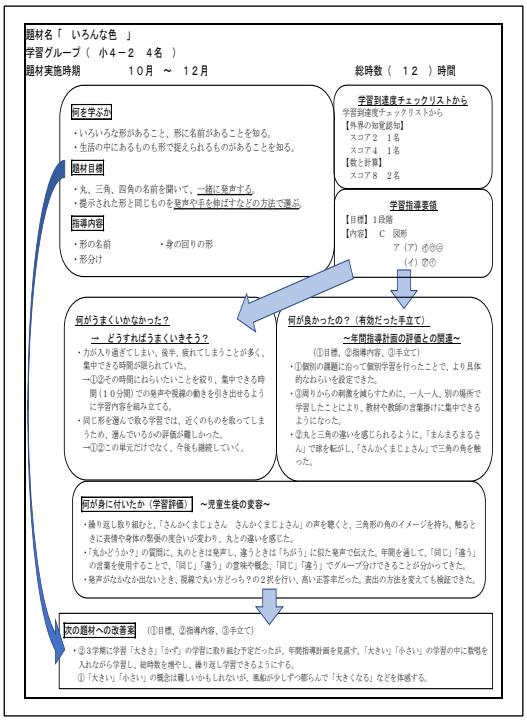


中間評価の際，全体の７２％の児童生徒が目指す姿を達成しており，新たに目指す姿を設定した。昨年度の課題から，よりスモールステップでの具体的な目指す姿を検討できるように中間で見直したことで，年度末では９２％の児童生徒が目指す姿を達成できたと考える。中間評価で△だった児童生徒も目指す姿を見直すことで，◎や○の評価となった。年度末評価で△だった児童生徒は欠席が多く，継続的に指導できなかったことが理由に挙げられた。継続した指導が難しい場合でも，実態や目標，指導内容，手立てを次年度へ引き継ぎながら取り組むことが必要である。

２）題材シートによる授業改善

定期的な授業改善のために，題材シートの様式を研究部から提案し，９月と 12 月に記入した。実態把握から目標設定への流れを整理できるように，学習到達度チェックリストのスコアや学習指導要領の項目も設けた。「①目標」，「②指導内容」，「③手立て」の項目で改善し，有効だった手立てや課題の改善案は，研究グループ全員で共有した。

＜資料１＞　題材シート



定期的に題材の振り返りを行うことで，児童生徒の学びの状況を確認し，「何が身に付いたか」を捉えながら授業改善できた。すぐに改善ができる「③手立て」などもあったが，「①目標」，「②指導内容」など，その題材だけでなく，年間指導計画を踏まえて検討，改善が必要なものもあった。児童生徒の学習評価を行いながら，題材を見直し，改善を図ることは，今後も継続する。

３）算数・数学科の授業の実践紹介

今年度から算数・数学科を新設したため，他の学習グループの目標，指導内容，手立てについて知り，授業実践に生かすことを目的として，算数・数学科の授業についてのアンケートを基に実践を紹介し合った。

【アンケートの項目と主な回答】
項目１：学習グループについて。
→学級で取り組んでいる。（２～６人の学級）
→スコアの近い２～３人で取り組んでいる。
項目２：うまくいっているところ。
→目標を焦点化したことで，指導内容がシンプルになった。
→具体物の有無，探索に色の学習を入れ，他の指導内容と絡めた。
→他の学習（集会，国語，自立活動）と関連付けて取り組んだ。
項目３：悩んでいること，知りたいこと，学びたいこと。
→算数・数学科と自立活動の区別（目標，指導内容，児童生徒の意識）。
→年間を通してのステップアップ。そのための年間指導計画や題材の組み方。
→小学部から高等部までの指導内容の系統性，発展性。

アンケートでは，基本的に学級単位で学習しているグループが多く，スコアが近い２～３人の学習グループが目標や指導内容を組み立てやすいとの結果だった。具体物の使用や聴覚も活用できるような教材，背景を黒にして提示物を見えやすくするなどの手立てが多くの学習グループで効果があり，他の学習グループでもすぐに改善して次の時間に取り入れることができた。

４)「自ら学ぶ」姿を目指した算数・数学科の授業研究会

グループ授業研究会を２回実施し，秋田大学教育文化学部　准教授　谷村佳則氏に１０月の授業研究会の指導助言に来ていただいた。

【提示授業】高等部１年２組　数学科　　題材名「色々な光」

【話題になったこと】

・効果音（聴覚）や教師の言葉掛けを控え，光（視覚）の提示に限定する。

・まばたきやバイタルサイン（自発呼吸数や心拍数）の分析をする。

→授業の振り返りで評価　→伝わった達成感

→「自ら学ぶ」姿へ

【授業研究会後の授業改善と生徒の変容】

授業研究会から	改善したこと	生徒の変容
・音を出さず，光に限定して提示する。	・言葉掛けを控え，光の教材も音を出さずに点灯させる。	・目を開けることはなかったが，まぶしそうに目を閉じたまま，まばたきをした。
・バイタルサイン（自発呼吸数や心拍数）を分析して，実態把握に活用する。	・心拍数が把握できるようにモニターをＴ１が見える場所に設置したり，自発呼吸をＴ２が確認したりした。	・新しい教材を提示したり，経験していない授業の流れになったりすると自発呼吸が増えた。 ・目を閉じていても，光の刺激を感じ取ると心拍数が上昇した。

研究会の指導助言【**Ｐ16 研究だよりNo.７参照**】から，算数・数学科としての目標，指導内容，手立て，評価について共通理解できた。そのことにより，その後の小学部１年２組算数科の授業研究会では，「目標は実態に即しているか」，「目標を具体的にすることで指導内容，手立てが精選されるのではないか」などの意見が多く出されたと考える。これは，算数・数学科としての職員の捉えが統一されつつあり，目標，指導内容，手立てを絞り込んで考えられるようになってきたからだと考える。

７　まとめ

（１）成果

・対象物に対して，視線を向ける，手を伸ばすなどの行動が見られたり，対象物に気付き感じたことを，笑顔やまばたきなど自分なりの方法で表現したりするなど，児童生徒の「自ら学ぶ」姿が見られた。

・学習到達度チェックリストを使用して，算数・数学科の視点から児童の学びの状況を把握し，学習指導要領の目標や内容に沿った目標設定ができた。

・題材シートで定期的に題材を評価したことで，児童生徒の学びを踏まえた授業改善ができた。

・年度当初は目標や指導内容，算数・数学科と自立活動との違いについて曖昧だったが授業研究会を重ねることで算数・数学科の捉え方を共有できた。

（２）課題

・題材シートの活用を工夫し，「何ができるようになったか」学習評価にも取り組む。

・学習グループや環境を見直して次年度スタートし，指導内容の系統性も整理する。

（３）次年度に向けて

今年度は，学習到達度チェックリストや題材シートを使用し，学びの状況を確認しながら授業改善を行うことで，児童生徒の「自ら学ぶ」姿が見られた。また，より絞り込んだ目標を立てることで指導内容がシンプルになり，教材や教師の支援が精選されることが分かった。次年度はより実態に沿った学習グループの編成や環境設定ができるように，昨年度取り組んできた自立活動シートも踏まえて取り組みたい。また，小学部から高等部までの目標や指導内容の系統性についても整理しながら，Ⅲグループの一貫性のある算数・数学科の指導について考えていく必要がある。

Ⅳグループ研究（訪問指導の学習グループ）

１　グループ研究テーマ

児童生徒が「自ら学ぶ」姿を目指して～国語科の目標を取り入れた授業づくり～

２　副題について

訪問指導の学習グループの教育課程は，自立活動と特別活動（行事等）で構成されている。一人一人の興味関心に応じて学習活動は様々であるが，その中でほとんどの児童生徒に共通している点が，自立活動の授業で「絵本」を題材とした学習活動を行っていることである。

学習指導要領の改訂に伴い,「絵本」を題材とした学習活動を見直したところ，国語科（主に小学部１段階）の目標や内容で取り扱うことができるのではないかと考えた。これまでの授業づくりを国語科の視点で見直すことで，児童生徒のめあてや教師のねらいが明確になり，より「自ら学ぶ」姿につながると考える。

３　研究仮設

自立活動の「絵本」を題材にした授業を見直し，国語科の目標や内容を取り入れた授業づくりを行う。目標が明確になることで，教材の提示の仕方や言葉掛けについての授業改善ができるだろう。また，児童生徒は絵本に関連する言葉や事柄について，気付いたことや感じたことを表出したり，教師の言葉掛けへの応答が明確になったりするだろう。(自ら学ぶ姿)

４　研究方法と内容

今年度は研究１年目として，以下のことに取り組む。

（１）指導記録を活用した授業づくり

・指導記録に，目標と評価（◎，○，△）を記入

（２）国語科としての試行

・自立活動の年間指導計画に「国語」の項目を設けて実施し，夏季休業中に国語科の年間指導計画を立ててみる

・ミニ授業研究会の実施

・国語科と自立活動の目標の違いを整理する

５　研究計画

５／１９	グループ研①	研究内容について
７／１４	グループ研②	研究概要について　ミニ授業研について
８／２４	グループ研③	年間指導計画の見直し
９／２８	グループ研④	Ⅲグループ国語　中堅研授業研究会に参加
１０／２０	グループ研⑤	ミニ授業研①（小３，中２）
１１／２４	グループ研⑥	ミニ授業研②（小６，中３）
１２／１５	グループ研⑦	国語科新設について協議
１／２６	グループ研⑧	グループ研究のまとめ
２／　９	グループ研⑨	グループ研究のまとめ

６　研究実践

（１）指導記録を活用した授業づくり

昨年度から実施している指導記録の書き方を継続した。その日のメインとなる学習活動の目標と，それについての教師の手立てやその時の児童生徒の反応を記入した。手立てや教材について振り返り，次時への授業改善につなげた。

（２）国語科としての試行

１）年間指導計画

訪問指導は，児童生徒によって，学習の回数が週２～３回，学習時間は３０分，６０分，８０分とそれぞれ異なっている。限られた学習時間の中で，計画的に国語科の学習を行うために，年間指導計画を立てることを試みた。

＜グループで出た意見＞

・どうしてこの時期にこの題材にしたのか，年間の題材の関連が見える。
・国語科も自立活動も個別に作成することになる。自立活動との区別に悩む。
・学習回数，時間が異なるため，時数の配当が難しい。

国語科と自立活動を分けて年間指導計画を立てる際の課題が見えてきた。

２）国語科の授業研参加とミニ授業研究会の実施

①昨年度国語科を新設したⅢグループの中堅研授業研究会に参加した。

中学部１・３年２組　　題材名「かみなり」

＜参考になった意見＞

・教科では個々のスキルを上げる。国語科でどんな力を付けさせたいのか。何をねらうのかをはっきりさせる。
・１年間を見通した題材の配列の根拠を明確にする。
・同じ題材で飽きてくるということはないのではないか。繰り返すことで期待感が高まる。前期で一つ，後期で一つの題材にどっぷりつかるのもよい。
・国語科として，注目させたい言葉に焦点を当てて授業をつくる。

＜グループ内で出た意見＞

・どうしてこの題材を選んだのかということが大事。
・子どもへのめあての伝え方が難しい。
・振り返りで，制作であれば作った物を見て評価できるが，国語は物が残らないので評価が難しい。授業を録画して，良かったところを評価するのがいいのか。
・集団の強みは子どもが様々な教師の持ち味に触れられるところにある。訪問は教師が一人なので限界があるが，教師も教材だという意識をもつ。
・国語のねらいをもって授業しないと自立活動になってしまう。教師がしっかりねらいをもつことが大切。

②ミニ授業研究会の実施

これまで行ってきた「絵本」を題材とした授業を，国語科の視点で見直して授業づくりをした。国語科と自立活動の目標の立て方の違いについてミニ授業研究会で検証し，何を学ぶことを目指した授業なのかを考えた。

映像で授業提示し，教育専門監，研究主任，Ⅲグループの研究部員と授業について話し合った。

【ミニ授業研究会①】

小学部３年　題材名　「だんまりこおろぎ」　**【P15 研究だよりＮＯ．６参照】**

本時の目標　オノマトペや挨拶の言葉に関心をもち，表情や目，手の動きで気持ちを伝える。

教師の手立て	児童の自ら学ぶ姿
・言葉の響きを楽しみ,関心をもてるよう，抑揚や強弱を付けてゆっくりと読み聞かせ，言葉に合わせて虫たちの教材を提示し，ゆっくりと動かす。 ・「コシコシコシ」の言葉やこおろぎの鳴き声をイメージしやすいよう，言葉に合わせて手をこすったり，最後の場面で鈴を用いたりする。 ・気持ちの表出を受け止め，気持ちに沿った言葉掛けをする。	・オノマトペを聞くと,「何かな？」というように目を開けたり，教材を探すように目を動かしたりすることがあった。 ・羽をこする場面で手を動かすことがあった。 ・鈴の音を聞いて，目を大きく開けたり手を動かしたりした。

＜目標と評価について＞

・目標の立て方と評価の仕方は自立活動と違う。国語の評価は◎，○，△をはっきりさせるとよい。表出を細かく見る。規準と基準をはっきりさせると言葉掛けも変わってくる。

・「コシコシ」を聞いてどう感じるかに目標をおいているのは国語科としてよい。

【ミニ授業研究会②】

中学部３年　題材名　「めっきらもっきらどおんどん」

本時の目標　おばけの役になり，せりふを聞いて宝のやり取りをする。

教師の手立て	生徒の自ら学ぶ姿
・登場人物の感情が伝わるように抑揚を付けて読む。 ・言葉のリズム感が感じられるように，めりはりをつけ，テンポよく読む。 ・宝のやり取りが楽しめるように，本生徒の好きな色や形，つかみ易い教材を準備する。	・教師の声を聞いて徐々に絵本を見るようになった。 ・宝のやり取りをする際に，言葉掛けに対して,教師にトントンと触れた。 ・「どうぞ」の言葉掛けで，教師が差し出した宝を受け取ったり，渡そうとしたりした。

＜国語科としての授業づくりと評価について＞

・読み聞かせの途中で評価するときは，声のトーンやボリュームを下げて本編との違いを明確にする。さりげなく褒めて物語の流れを止めないようにする。

・やり取りをするときは，主語をはっきりさせる。「どうぞ」「ありがとう」を教師が１人で言うことになるので区別する。

・言葉と行動の結び付きを見取るため,「どうぞ」の言葉掛けを聞いて，手を伸ばしたら○にしている。

③国語科と自立活動の目標の違いを整理する

（例）中学部３年「めっきらもっきらどおんどん」

国語科の目標	自立活動の目標
・教師の読み聞かせを聞いて楽しむ。【小１段階・知】 ・絵本の中の一場面を教師と一緒に演じる（表現する）。【小１段階・思】 ☆読み聞かせを聞いて楽しむ，絵本などに注目する，表情や身振り，発声などで表現する，などをねらえる。	（絵本を手段として） ・手の動き「握る・放す」をねらう。 ・コミュニケーション面（手段の広がり，応答など）をねらう。 ・視覚や聴覚，触覚を十分に使うことをねらう。 ☆学習上の困難さを克服・改善する視点から目標を立てる。
＜国語科と自立活動を関連付けると＞ 宝のやり取りの場面を表現するという目標にせまるために， ・「握る・放す」の手の動きを用いる。【身体の動き】 ・楽しく表現できるように，好きな感触や色，大きさの球を使用する。【環境の把握】 ☆自立活動の要素を手立てに使って，国語科の目標を達成する。	

国語科と自立活動の目標を比較してみると，絵本を手段にして自立活動の目標を達成するというよりも，絵本を中心にして国語科の目標を達成するということが児童生徒に学ばせたいことだと分かった。そして，今まで自立活動で行ってきた「絵本」を題材にした授業においても国語科の目標が含まれおり，国語科の目標や学習内容を取り扱った授業が児童生徒にとって分かりやすいということが分かった。

７　まとめ

（１）成果

・昨年度から行っている指導記録の書き方が定着したことで，目標を意識した授業づくり，手立てや教材についての振り返り，次時への授業改善という流れができた。

・教師が国語科の目標をもって言葉掛けを意識することで，繰り返しの言葉に気付いたり，絵本の一場面を取り上げたやり取りで手を伸ばしたりという自ら学ぶ姿が見られた。

・ミニ授業研究会で国語科と自立活動の目標を比較し，何を学ばせたいのかを考えることで，国語科の目標や学習内容を取り入れた授業が妥当であることが分かった。

（２）課題

・国語科の目標を焦点化し，指導内容や手立てを整理する。

・限られた指導時間の中で目標が達成できるように計画的に実施する。

・どこまで理解しているか検証することが難しいため，複数の目で評価できるようにミニ授業研究会などの授業を見合う場を設定する。

（３）次年度に向けて

国語科を実施することとする。実施に当たっては，一人一人の目標設定や自立活動との関連について共通理解を深めて，次年度の授業づくりを進めていく。合わせて，評価についても検討していきたい。

Ⅲ　自立活動の実践

今年度の自立活動の実践例を6区分に沿って紹介します。

＜健康の保持＞

1　対象児童・生徒の実態

・高等部　二分脊椎、水頭症による不全対麻痺、直腸膀胱障害

・２～３時間おきに自己導尿を行っている。煩わしさを訴えることもあるが、気持ちを切り替えて行っている。

・排便は服薬で促しており、腹痛や下痢の症状が出る日がある。臀部の感覚に麻痺があるため、排便のタイミングをつかむことや、拭き取り等の処理に難しさがある。

・体調管理については、保護者が状態を把握しており、必要に応じた的確なアドバイスがある。定期的な通院もあり、医療との連携もできている。

・パソコンを使った文字入力が得意で、卒業後はパソコンを使用するような事務職を希望している。

2　背景要員や課題設定理由、年間目標(自立活動シートより)

背　景　要　因	～のため、困難さが生じている
・便の状態が安定せず、排せつトラブルの予防が難しいことがあるため、排便に不安を感じている。 ・臀部の感覚にまひがあり、排便時の処理が確実にできないため、介助を必要とすることがある。	
課題設定理由	～すれば（～があれば）～できる（だろう）
・服薬や排便状態を記録して傾向をつかむことにより、服薬の調整や排便の予測ができるようになり、安心して生活することにつながるだろう。 ・排便処理をするうえでの課題を整理し、解決方法を考えたり練習したりすることによって、自分で処理ができるようになるだろう。	
年　間　目　標	①　排便のリズムを把握し、自分に合った服薬の調整や、タイミングよく排便に向かう。 ②　自力で排便の処理を行う。

3　指導の実際

(1)健康チェックシートの記入と考察

・生活に影響を及ぼすような不調について整理し、健康チェックシートの様式を作成する。

・毎日登校後に記入し、不調や排便への不安について教師と相談する。

・自立活動の時間に振り返り、体調の変化（良い、悪い）の原因を２か月に１回程度考察する。

・必要に応じ、連絡帳、面談を通して保護者と相談する。

月　健康チェックシート

日　付	日(土)	日(日)	日（月）	日（火）
天気／予想最高気温			／	／
睡眠時間				
睡眠状態			良　普　悪	良　普　悪
朝　食			普　少　無	普　少　無
体調			良　普　悪	良　普　悪
			頭痛	頭痛
			腹痛	腹痛
			生理	生理
			その他	その他
排便	金曜検便　あり　なし	土曜検便　あり　なし	前日排便　あり　なし	前日排便　あり　なし
	学校　自宅　登下校	自宅　他	自宅　他	学校　自宅　登下校
	回	回	回	回
	１　２　３	１　２　３	1(普)　2(軟)　3(下)	1　2　3
	多　普　少	多　普　少	多　普　少	多　普　少
	あり(　)　なし	あり(　)　なし	前日服薬　あり(包)　なし	あり(　包)　なし
			なしの理由	なしの理由
イベント				
生活を振り返って				

その日の体調や前日の排便状態について、丸を付けてチェックする。
不調が続いた場合、原因や対応について教師と相談する。

（2）排便処理の実際

・便の状態や、そのときに自分でできること、支援が必要なことを表にする。
・支援が必要なことについて、自分でできそうなこと、挑戦できそうなことを考える。
・排便時に処理の仕方を教師と一緒に確認し、改善を重ねる。

（3）今後の生活の意識付け

・排便の管理や自力での処理は必要な力であるという意識を高めるために、働く場面を想定しながら排せつトラブルへの対応を考える機会を設ける。
・困ったことが起こった時や、処理が難しかった時を捉え、課題や解決方法を一緒に考える。
・「二分脊椎（症）の手引き」を通して、同じ状況の人がどのような対応をしているか、悩んだときの相談先について知る機会を設ける。

4　生徒の変容

・健康チェックシートへの記入が習慣化し、生活と体調の関連を客観的に振り返ることができた。
・時間割等をもとに一日の排せつ予定を立て、予定通りに生活するようになった。
・排せつトラブルの予防への意識が高まり、尿取りパッドを使用するようになった。
・排せつの有無よりも便の状態が生活に影響を及ぼすことに気付き、便の状態に応じて服薬した。
・排便があった際、時間が掛かっても自力で処理しようとする意識が高まり、自宅でも自分で処理するようになった。
・排せつの失敗が少なくなり、自力での処理に自信がついたことで、保護者の送迎回数が減ったり、休日に友達と出掛けたりするようになった。

＜心理的な安定＞

1　対象児童・生徒の実態

・中学部　脳性まひ　精神発達遅滞

・初めての場所や活動は不安感が強く、活動の流れを確認したがり、自分の希望する活動内容・流れと異なるときは、首を振って抵抗を示すことがある。

・自分の伝えたいことが伝わらなかったり、活動に見通しがもてなかったりするときは、泣いて左手を噛み、唾を吐くという行動が見られる

・見通しがもてない活動では、友達に順番を譲り自分は最後に行いたがる。

・瓶の蓋を開けたり閉めたり、シールを剥がして貼るなど手指を使いながら繰り返す活動を好む。

・音楽を聞いたり洗濯をしたりすることを好む。

2　背景要員や課題設定理由、年間目標(自立活動シートより)

背　景　要　因	**～のため、困難さが生じている**
・思い通りにならなかったり、やることが分からなかったりするときは、見通しがもてないため、泣いて左手を噛み、唾を吐いて行動できなくなる。 ・初めての場所や初めての行動は、不安になるため落ち着きがなくなり、友達と一緒に行動できなくなる。 ・意思伝達代替手段を活用し自分なりに表現するが、正確な言葉でないために特定の教師にしか伝わらない。	
課題設定理由	**～すれば（～があれば）～できる（だろう）**
・その日一日の流れを朝に教師と確認することで、見通しをもち、変更があるときには、流れが変わることを確認することで活動に向かうことができる。 ・意思伝達代替手段を使ったり、二択、または三択から選んだりすることができれば、自分の気持ちを伝えることができる。	
年　間　目　標	①　１日の活動の流れを朝に確認し、新しい活動は事前学習することで見通しをもって活動することができる。 ②　意思伝達代替手段で気持ちが伝わるように自分で入力できる言葉を増やす。

3　指導の実際

（1）スケジュールの確認

・朝の会では、１日の確認を行い、変更があった際には連絡を板書した。

・必要に応じてイラストで示したり、演示したりした。

・学級に月ごとのカレンダーを置き、予め行事が分かるように前月に記入して示した。

・気持ちが安定すると、活動に向かえることもあるので、これからの活動を順にメモ帳に書き読み上げて本人に渡し、いつでも確認できるようにした。

・何度もスケジュールを確認したがるときは、「次は何」と問いかけ本人からの答えの表出を促し、理解度を確認しながら行った。

・終わった活動には、「おわりました」と一緒に書くことを取り入れると、それを楽しみに活動に臨む様子が見られた。

(2)コミュニケーション活動の充実

・トーマスのあいうえお表やＶＯＣＡでコミュニケーションを図り、対話する経験を大切にした。

・多くの集団と関わり合う場を「かおりキラキラショップ」で段階的に設定した。

〈かおりキラキラショップ Part1：学級の友達との協力の一連の流れ〉

①「お願いします」と渡された商品を袋に入れる。	②袋に入れたものを、かごに入れて次の係へ渡す。	③ＶＯＣＡ（「お願いします」）を押す。

当初、①に袋に貼るシールをお客さんに選んでもらうという活動を加えていたが、難しかった。

〈かおりキラキラショップ Part２：同年齢及び異年齢集団との関わり〉

対象を中学部→高等部→小学部の順番で、「かおりキラキラショップ」を開催した。関わる際に、３つの意思伝達代替手段を活用した。以下に活動の流れを紹介する。

１：ＶＯＣＡ（左写真①）（「いらっしゃいませ、引換券をお願いします」と録音）を押し、引換券をもらう。

２：ＶＯＣＡ（左写真②）（「香りを選んでください」と録音）を押して、香りを選んでもらう。

３：ＶＯＣＡ（左写真③）（「ありがとうございました」と録音）を押して、配達係の生徒に商品を渡す。

(3)泣いて左手を噛み、唾を吐くことに対する対応について

・周囲の生徒を離して安全確保をした上で、必要以上に反応せずに見守った。

・場面を変えたり、職員が変わったりしたことで、長引かなくなった。

・落ち着くのを待って、あいうえお表などを使って伝えるように求めたり、難しいときは職員が気持ちを代弁したりするなどして本人の気持ちを整理した。

4　児童・生徒の変容

・スマートフォンを耳にあてるしぐさをして自分の好きな人や物とのやり取りを楽しむようになった。

・決まった言葉は、ハンドサインを活用して表現することができるようになった。

・泣いて左手を噛み唾を吐いたときは、長引かず気持ちを切り替えて学習に臨めるようになった。

＜人間関係の形成＞

1　対象児童・生徒の実態

・小学部　先天性側弯症、精神運動発達遅滞

・特定の教師に固執して、その教師が他の児童と関わっていることや、物事が思い通りにならないことへの苛立ちから興奮状態になり、自分の活動に集中できなくなることがある。

・接する相手によって態度を変えることがあり、ある教師には笑い続けたり、ある教師には叩いたりと相手の反応を見ながら気を引こうとするところがある。

・集団での活動に慣れてきて、逸脱することなく友達と一緒の活動に参加できるようになってきたが、友達の様子を冷静に見ている場面が多く、自ら積極的に関わろうとする場面は少ない。必要な際には「どうぞ」「ありがとう」など相手の顔を見てやり取りができる。

・適切な行動をしたり、発声がうまくできたりした際に褒められると、とても喜んで自信をつけ、その行動や発声が定着することが多い。

2　背景要員や課題設定理由、年間目標(自立活動シートより)

背　景　要　因	～のため、困難さが生じている
・感情が高まった際、情緒のコントロールが難しくなるため、過剰な反応（相手を叩く、抱きつく、髪の毛を引っ張るなど）をしてしまう。 ・見通しがもてない活動に対して、不安感や苛立ちが生じるため、落ち着いて活動することが難しくなる。 ・表出言語が限られているため、気持ちを相手にうまく伝えられない。	
課題設定理由	～すれば（～があれば）～できる（だろう）
・感情が高まった際、落ち着ける人や場所、気持ちを切り替えられる方法を見付けられたら、気持ちを静める経験を重ねることができるであろう。 ・学習内容を教材や絵カードなどを見て具体的にイメージでき、学習の流れや時間の目安が分かれば、落ち着いて活動に向かえるだろう。 ・色々な言葉をまねて発声する機会が多くあり、はっきりと発音できた際に周りから褒められることで自信をつけると、表出言語を増やせるであろう。また、音声言語だけではなく、絵カードなど補助的手段を使うことで、相手に気持ちを伝えやすくなるだろう。	
年　間　目　標	・気持ちを落ち着けて、いろいろな人と関わり合う。

3　指導の実際

(1)特定の教師に固執したり、興奮したりした際の対応について

・児童を担当する教師を週替わりで変え、児童とのラポートを十分にとり、どの担任でも同じように活動できるようにした。

・興奮状態が見られた場合には、様子を見ながら担当や場所を変えて気持ちを落ち着かせ、気持ちを切り替えることができるよう担任間で共通理解を図って対応をした。

・「〇〇先生も一緒だよ」など、児童を安心させるような言葉掛けをした。

・教師の気を引こうとする行動が見られた時は、児童の気持ちを受け止めつつ、今向かうべき事に気持ちを向けられるよう冷静に対応をした。

(2)意思疎通のための絵や写真カードの活用

・教師の意図が伝わりやすくするため、言葉掛けに加え、手掛りとなるよう学習内容や手順が分かる絵や写真が入ったカードを提示した。

・自立活動の時間に、児童が気持ちを伝える手段として、感情や行動、場所を示したシンボル絵カードや写真カードを使用した。[写真１]

[写真１]

[写真２]

・「のど　かわいた」「おなかがすいた」「ほん　よむ」「トイレ　いく」「かいだん　いく」など。シンボル絵カードや写真カードを組み合わせて示すことで、自分の気持ちが相手に伝わり、相手がそれに応える経験ができるようにした。[写真２]

(3)いろいろな教師や友達と関わる機会の拡大

・朝の活動で学年のごみを収集する係を担当し、各クラスをまわりながら「(失礼しま) す」「(ごみは) ありますか？」などと、友達や教師とやり取りする機会をつくった。[写真３]

・自立活動の時間に「好きな○○（食べ物、色、動物、キャラクターなど）アンケート」のボードを持ち、友達や教師に尋ね歩いた。教師と一緒に「(私は) ○○（が）好き（です)」「すきな○○（を教えてください)」「(シールを) どうぞ」「(教えてくれて) ありがとう」のやり取りを通し、いろいろな人に話し掛けて気持ちを聞く場面を設定した。[写真４]

・毎日、保健室での検温の際、「(おねつ) お願いします」「ありがとう」とジェスチャーと発声とで養護教諭とやり取りした。[写真４]

[写真３]

[写真４]

[写真５]

4　児童・生徒の変容

・何かのきっかけで突然興奮することはまだ見られるものの、教師の働きかけに応じ、気持ちの切り替えが早くなった。相手を叩く、抱きつく回数が減り、髪の毛を引っ張る行為は見られなくなった。

・絵や写真カードを手掛りにし、学習への見通しがもてるようになったことで、落ち着いて課題に向かい、時間いっぱい椅子に座って学習できるようになってきた。

・自ら発したりまねしたりして発音できる語や言葉が増えた。褒められた嬉しさや、相手に伝わった喜びを知ることで、自分から相手に話そうとする姿が見られるようになった。

・ゴミ係の活動や保健室での検温、インタビューで、同じフレーズを繰り返したことで、不明瞭ながらも部分的に自分から話そうとするようになってきた。

・これまで休み時間には横になって絵本を見ながら体を休ませていることが多かったが、誰かと関わりたい気持ちが強くなり、教室を出て、廊下を散歩しながら出会った友達や教師に「こんにちは」と自分から挨拶をするようになった。

・学級の仲間意識が芽生え、教室を出る際は「いってきます」、戻る際は「ただいま」と友達や教師に自分から挨拶をするようになった。

＜環境の把握＞

1　対象児童・生徒の実態

・高等部　脳性まひ

・移動する際、目的地に向かう方向をしばしば間違う。端と端を合わせて紙を折る、糊付けして決められた枠の中にずれずに貼る等、手指を使っての正確な位置取りが必要な作業が難しい。

・段差のない道では安定して自力歩行できる。階段昇降では手すりを両手で保持して右手足を前方にした横歩きで移動できる。バランスを崩しても四つばいの姿勢で手を地面に着いて静止でき、大きな怪我につながる転倒はしていない。

・将来はパソコンのデータ入力、書類整理、来客応対等の一般事務職への就労を希望している。

2　背景要員や課題設定理由、年間目標(自立活動シートより抜粋)

背　景　要　因	～のため、困難さが生じている
・移動時に方向を間違い、迷ったり戻ったりする困難さが生じている。 ・文章の行や、書き写す文字を見落とす困難さが生じている。	
課題設定理由	～すれば（～があれば）～できる（だろう）
・手掛かりとなる目印を覚えたり、目印を探す習慣をつけることで、移動しやすくなったり、正確に作業しやすくなったりするであろう。	
年　間　目　標	・目的地まで一人で移動したり、正確に作業したりする。

3　指導の実際

（1）　色や文字情報を手掛かりとした歩道の位置や方向の確認

・色の違い（歩道…茶色）を手掛かりとして歩道を歩くことを確認した。

→日常使用する道や通路についても、色や配置物など何らかの手掛かりを見付けて意識する習慣付け

・いつもと違う時間の列車で帰宅する機会をとらえて、駅の番線表示（数字)、発車時刻を確認して移動することを確認した。

→数字や文字情報を確認し、本人が方向や場所を判断する手掛かりとして活用することの習慣付け

（2）大まかな区切りを手掛かりに、その空間内に書く経験

・調べ学習の発表を板書形式にし、自分で字の大きさや配置を考えて書く機会を設けた

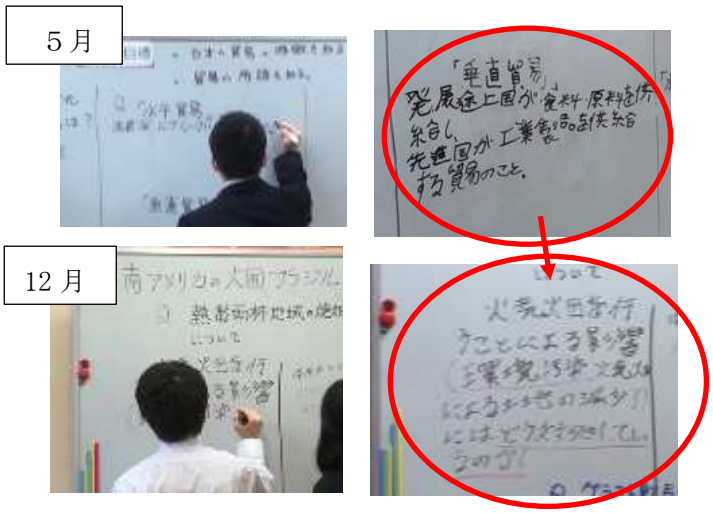
→文章の書き写し、限られた空間に文章を配置して書くための目算や調整力の伸長

4　生徒の変容

・通学時の駅構内の移動や列車の乗降車については、改札口方向への目印を決めるなどして、大きなトラブルなく利用できている。生徒本人が「失敗続きになると思ったけれども、やってみたら案外自分でできました。」と、自信をつけた様子だった。

・板書による発表については、５月に始めたときは写真のように不自然な改行や波打つような記載になっていたが、１２月時点では文字の配置が安定し、見通しと自信をもって書いていることが確認できた。

・場所や空間の把握の際に、自分なりの手掛かりを見つけて、見通しをもつということを意識することで、卒業後の生活範囲の広がりに適応する自信がついた様子である。



＜身体の動き＞

1　対象児童・生徒の実態

・中学部　脳性まひ

・頭部の保持が不安定、仰臥位以外の姿勢で活動することが少ない。

・仰臥位の姿勢でマットが回転する粗大運動が好きである。

・好きな活動を伝えると期待して、笑顔や身体の動きで伝える。

2　背景要員や課題設定理由、年間目標(自立活動シートより)

背　景　要　因	～のため、困難さが生じている
・仰臥位以外の姿勢での活動経験が少ないことから、仰臥位以外の姿勢になると、緊張が強くなり活動に臨むことが難しくなる。 ・視覚情報が入りにくく、教材に気が付かないことがある。 ・今年度の途中に気管切開をしたため発声ができなくなり、精神面、身体面での配慮が必要となる。	
課題設定理由	**～すれば（～があれば）～できる（だろう）**
・座位保持装置やバギーに乗っての活動、側臥位の姿勢に慣れて、リラックスして活動することができれば、活動の幅が広がるだろう。 ・はっきりとした色合いの教材を準備し提示の仕方に配慮すれば、教材に視線を向け触れようと手指を動かすだろう。 ・表情や身体の動きで気持ちが伝わる経験を積み重ねれば、コミュニケーションの方法が定着し、安定した気持ちで学習できるだろう。	
年　間　目　標	・座位保持椅子や側臥位など、様々な姿勢で１０分～２０分程度活動する。

3　指導の実際

(1)姿勢の保持について

座位保持装置で５～１０分程、体育館や自立活動室、療育センター売店へ散歩をする。

(2)粗大運動を取り入れた学習

マットの上に仰臥位になり、教師がマットを回し体が回る感覚を味わう。

(3)表情や身体の動きで気持ちを表す学習

教師とやり取りで、身体に触れ合うように工夫し、体を動かしやすいように褥瘡予防シートを使用し、操作しやすいボール等の教材を使った活動やごっこ遊びを行った。

4　児童・生徒の変容

・座位保持装置での活動では、働き掛けに頭をまっすぐにしたり、笑顔を見せたりすることが増えた。

散歩では、知らない場所や関わりの少ない教師に気付き、視線を向けるようになった。

・「マットで遊ぶよ」と伝えると、活動を期待して毎回笑顔を見せるようになった。

・マットを使った粗大運動では、上体を少し起こした姿勢で笑顔を見せるようになった。

＜コミュニケーション＞

1　対象児童・生徒の実態

・小学部　脳性まひ

・まひの状態が重く、発語が不明瞭であることや、伝えたいことの要点をまとめることが難しい、どのように伝えたらよいか分からないなどの理由から、うまく相手に伝わらず泣いてしまうことがある。

・ユーチューブやテレビゲームなどが好き。

・物事の仕組みや手順や活動が分かると、黙々と活動に向かう。

2　背景要員や課題設定理由、年間目標(自立活動シートより)

背　景　要　因	～のため、困難さが生じている
・まひにより、発語が不明瞭であり、主語が抜けているなど文章構成に課題があるため、話していることが相手に伝わりにくい。 ・緊張や不随意運動があるため、手が上手く動かず、物を握ったり動かしたりすることが難しい。	
課題設定理由	～すれば（～があれば）～できる（だろう）
・様々な場面で視線入力装置を使いながら文章構成を学んだり、相手に伝わる話し方について学習したりすることで、円滑に相手に伝えられるようになるだろう。 ・嫌なことがあったときに、自分の気持ちや意見を周囲に伝えられたら、人とよりよく（泣いたりせずに）関われるようになるだろう。	
年　間　目　標	・国語の学習や校内外の人と関わる機会の中で、視線入力装置を活用しながら、相手に伝わるような文の作り方を学び、自分の意見や話したいことを伝える。 ・嫌なことがあったときの気持ちの表し方や伝わりやすいタイミングを覚え、実践する。

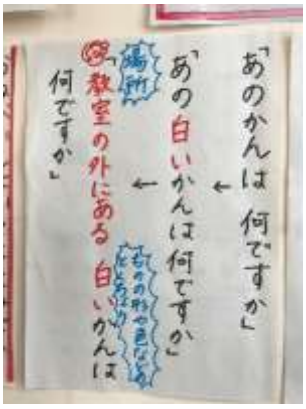
3　指導の実際

（1）文章構成する力を高めるための指導（正しく主語と述語を使う、具体的に話す）

・国語科で検定教科書から「馬のおもちゃの作り方」などの説明文で学習した内容を学校生活全般でも触れた。

・主語と述語を正しく使った文と正しくない文を提示してどちらが分かりやすいか考えるようにした。

・よく使われる例文や間違いやすい文について教室内に掲示し、意識し続けられるようにした。



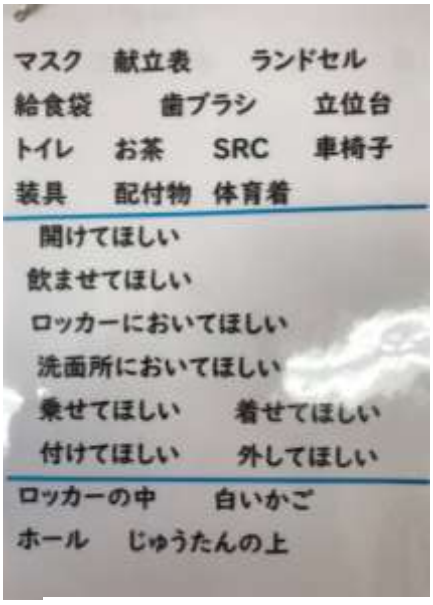
教室内壁面

（2）伝わらない時に泣いてしまうことへの対応について～コミュニケーションカードの作成と活用

・どんな時に泣くのかが自分で分かるようにこれまでの出来事を板書したところ、「支援を依頼したときに伝わらないと泣いてしまう」と気付けた。どうしたら泣かずに済むのか改善策を担任と相談しながら考え、伝えたいことを一覧にしたコミュニケーションカードを視線入力装置で作成した。

・主語と述語を正しく使わないと伝わらないことに気付けるように、コミュニケーションカードは、主語と述語に分けて書くように指導した。

・伝わらなくて泣いた時には、「何を」「どのように」「どんなタイミングで」伝えたらよかったのか、改善策を考える時間を設定した。本児は自分の行動を振り返る機会を設定したところ、「次は～と話したい。」などと前向きな発言が聞かれるようになった。



コミュニケーションボード

視線入力の様子

（3）伝わりやすい環境やタイミングが分かるための指導

・たくさん人がいる状況と、静かな状況では伝わりやすさに違いがあること、伝えたい相手が何かをしている時には、伝わりにくいことがあることなどに気付けるように、ロールプレイを行い、違いを体験する機会を設けた。

4　児童・生徒の変容

・主語と述語、副詞を正しく使ったり、具体的な表現ができるようになったりしたことで、気持ちを正しく文にすることができ、担任以外の教師にも伝わるようになった。また、これまで関わりが少なかった教師などに伝わっていることを本児も実感でき、「伝わるようになった」「あ、主語がなかった」などと自分で話すようになった。

・臨床心理士による、発達検査により言語が昨年度よりも＋１１か月と変化した。

・自分がどんな時に嫌だと思って泣きやすくなるのかについて、少しずつではあるが、理解してきている。どう対応したら、いいのかを考えられるようになり、泣くことが減った。

・たくさんの人が話しているところでは、伝わりにくいことが分かり、どうしたらいいか具体的に考え、話すことができるようになってきた。

あ と が き

研究にはゴールがあるのだろうか。
日々の積み重ねの中で、ふと漏らすつぶやきである。

本校は今年度10周年を迎え、節目の年としてこの一年間を歩んできた。また今年度は、新学習指導要領が全面実施へと移行する時期と重なり、「生きる力　学びの、その先へ」の具現化に向けて、新たな学びへの進化を目指した取組を研究に盛り込んで実践してきた。

折しも、新型コロナウイルス感染症の世界的パンデミックが起こり、その影響は教育活動全般に及んだ。もちろん、研究活動そのものも三密回避のため大きな制約を受け、研究グループの小グループ化、ＩＣＴ機器の活用等の工夫を行いながら、子どもたちが自ら学ぶ姿を目指して、「何を学ぶか」「何が身についたか」が明確な授業づくりに全校で取り組んできた。

新学習指導要領を読み込み噛み砕き共有し、カリキュラムマネジメントも視野に入れて教科指導という新しい試みにも挑み、年度当初は心もとなげだった職員が、教育課程の編成に係る意見を提案する等、一回り大きくなった姿を見せてくれるようになった。何より、それぞれの職員が授業づくりに取り組む中で、一人一人の子どもの成長について語り合い喜び合ったり子どもに寄り沿ったりする姿は、実践研究の核を逃していないと頼もしく感じた。また、研究部は、計画的な研究推進、客観的な情報の提供、推し進めてきた研究の整理等、職員が目指すべき目標を明確にして全校研究の舵取りをしてくれた。手前味噌ではあるが、１年間の歩みは確実なものであったと思う。

実は秋田きらり支援学校の歴史は10年とまだ浅いが、前身は県立秋田養護学校と県立勝平養護学校の二校、その始まりは昭和34年に県立太平療育園内に開設された養護学級にある。遡れば60余年に渡る諸先輩方の実践の積み重ねがあり、それは本校のかけがえのない財産として職員個々に受け継がれている。この実績と、秋田県唯一の肢体不自由及び病弱者である児童生徒のための学校であるという自負が、コロナ禍での研究を推し進めてきた力の一つであると思える。

本研究は本校の実践の１年間の記録であると同時に、未来への課題提起でもある。まだ、未熟な点が多々あり、試行錯誤の段階であることは否めないが、本校以外の皆様にも、それぞれの研究や実践を進める糧として活用していただければ幸いである。

ここからまた、新しいスタートが始まる。私たちは、不易流行を踏まえながら、今の学びが子どもたちの未来へとつながることを願って実践を進めていく。

その理由は、実践研究のゴールは一人一人の子どもたちの成長にあることを知っているからである。

副校長　大山　美香

令和２年度　秋田県立秋田きらり支援学校　研究同人

校　長　　新目　　基　　副校長　　大山　美香
教　頭　　兜森　宏征
教　諭（兼）教育専門監　　二階堂　悟　　島津　憲司
研究主任　　藤原恵理子
学部主事　　小松　美幸　　平川　裕子　　秋元　英明

Ⅰグループ（準ずる各教科等を学習するグループ）

◎小野寺珠貴　○柿﨑　和恵　○宇佐美尚美　慶長美紀子　佐藤　淳美
蔭山佐智子　山本　泉子　大友明希子　藤井奈緒子　江川　悠介
斎藤　　仁　小林佐知子　佐藤　　篤　保坂まゆみ　近江　美歩
佐藤　忠浩

Ⅱグループ（知的代替の各教科等を学習するグループ）

◎赤川　由美　○加藤真依子　○市川奈津子　○鈴木　　陽　藤原　淳一
三浦　朋子　神居　麻恵　神部　直子　原田もとよ　小野　　毅
村上　世生子　佐々木里枝　高橋　　悠　鷲谷　武彦　佐々木千春
吉崎　真紀　柳田　栄基　菊地真智子　池田　　修　小野　恵理
諏訪　寿昭　北條　幸恵　藤田亜樹子　伊藤　咲子　一関留美子
田村祐貴子　佐々木龍雄　小嶋　　聖　小玉　千春　葛西　輝美
冨岡　雅江　伊藤　和樹　菊地　真美　長谷川絵里　竹場　久美
佐々木恭兵　高橋　　聡　小川　順子　荻原　正賢

Ⅲグループ（主として自立活動を学習するグループ）

◎髙橋絵里香　○秋本久美子　○菊池　高之　長谷恵美子　柴田　法子
山内かほる　久慈由紀子　目黒　敦子　伊藤　晃子　信太真喜子
福田　純悦　大川里香子　永井　純子　須田　孝子　北原　桃子
渋谷　宏美　笹渕理恵子　松岡　圭一　梅田　季和　秋山フサ子
高橋　亜紀　若月　　圭　栗谷川美和子　北嶋　初美　池田　　和
久保　妃香　縄田屋美幸　熊地　勇太　門間　洋平　菅原　尚子
小林　　哲　畑山　　拓　高澤衣久子　相原　祐子　越後　　駿
菅原　智子

Ⅳ（訪問指導の学習グループ）

◎髙橋　朋子　佐々木由美子　佐藤　友香　廣川　佳世　福田英美子

養護教諭　　栄田　優子　成田　ゆか　最上　真帆

※　◎はグループチーフ　○サブチーフ

き　ら　り

令和２年度（第 11 集）

～実践と研究のあゆみ～

研 究 テ ー マ

児童生徒が「自ら学ぶ」姿を目指して

～「何を学ぶか」「何が身に付いたか」を明確にした授業づくり～（１年次）

発行年月日　令和３年３月

発　行　所　秋田県立秋田きらり支援学校

〒０１０－１４０９

秋田県秋田市南ケ丘一丁目１番１号

ＴＥＬ　０１８（８８９）８５７３

ＦＡＸ　０１８（８８９）８５７５

ホームページ　http://www.kagayaki.akita-pref.ed.jp/kirari

メールアドレス　kirarisien@akita-pref.ed.jp